

165

429

教正驥尾日守師著

一喝降魔談全

報光社發行

特45
117



大

日
心

初月



御

目録

目録

凡例

- 一 此書を一喝降魔談と題し中古の僻學人法躰一の愚魔を叩き大石日應が辯惑觀心抄の啞義を糺明す
- 一 此書を平假名を用ひて俗語を以てするものは他なし在家の妄信者が盲目を開かしむるためなり觀者笑止を了せよ
- 一 此書始中終人法躰一を苛責するは末法の法相を顯示するためなりゆへに末法觀心論ともいふべし
- 一 此書の要は法華の何物を知らしむるにありゆへに法相といふことばを數多に唱ふるなり讀人知るべし
- 一 此書は種熟脱の成佛を告げたり義を讀て其意を取るべし正さに

凡例

三十一

一念三千といふ言語を置く知るべし

一此書全躰の意を了せば本有の佛法を知るなり熟誦して解せよ

一 喝降魔談序

古人曰く。蔬食を喰ふ者には。僧に。太宰の美味なるを論しかた。我を被たる者には。俱に純綿の麗密なるを謂ひ難し。實に其哲言の如く。其位なく其徳無き者には。法相の嚴密なるを論するに足らず。人其頭へを剃り袈裟を着すといへとも。未だ本來本有の佛法を習はざる者には。無始常住の實相を語るに詮なく。吁々偶然其門跡に列居すといへとも。初心末學にして曾て相傳を受けず。一宗の奥義を。盡さざる者に。無作本有の。色香美味皆悉具足を。僧に語るに。其要する處無きものなり。此者をして。古哲は。即飧食者とは。名けたり。宜へなるかな。常住の醍醐味を嘗めずして。曾に人法躰一の邪眼を愈さず。哀れなるかな。三五塵點生死の縛に就ひて。永く脱苦を得ざることを。宛かも。繼かれたる猿の。柱を廻るか如きか。法佛誹謗の罪苦。長劫に流るものなり。今其指す人は誰そや。謂く。駿河國富士郡上野條村大石寺住職大石日應是也。それ諺にいふ。師は針の如く弟子は糸の如しなれば。俱に泥梨に。

趣くを憫れむ。故に。予が去明治廿三年冬。從來の邪觀即人法躰一の破邪を。先以て富士五山の。堂々たる貫首に試む。大石日應。予が其精心を知らずして。他縁が問しく。予う破謬書の辯駁を。無謂く小僧名を以て表し。返書に宛てたり。予是を閲るに。問はず物語りを。喋々書散し。肝心乃予が質疑を決答せず。爰を以て。更に予が弟子に代命して。其辯駁上の事實。予か質問に。適せざるを。糺問せしめられたれとも。是に亦答辯せず。加之ならず。日應が所爲に於ける。其辯駁書を已れが檀信徒の手前を飾りて。已れが機關雜誌に出せしも。予か破謬書の要たる。質疑の處は。覆ひ潜くして載せずといふ。兎角して問答も止みたり。立戻りて予か最初は。一派の研究を試みるか素志ありしも。終ひに其望を失ふたり。然るに日應不禮なるかな。予に對する辯駁書を。小僧名を以てせる杯の。不道義を極むるを以て。所詮論するに。足らざる者と斷念せしが。是を此儘に格うは。倍々人法躰一の根を固めて。將來に其迷闇を破ふることを得すと。依て是を憂ふるの餘り。去明治廿五年春。予九州漫遊の歸路。纔かに四五日

一旅舎に腰を懸けて。諧書せし第一末法觀心論なる者を。發刊せし處。日應門下の妄信者が。此觀心論を見て肝を冷やし。怨憎逞ふして。是を宗務院に責りて。予に罰を乞むむとして。其騒動一方ならず。雜誌に喋々罵詈譏を極め。下劣なる舉動云々む方なし。其末漸くして。三年目昨廿七年に至て。辯惑觀心抄あるものを著して。予が曩の觀心論辯駁に課せたるなり。予昨年より是を聞くといへども。彼等か語る法門は。妄想を書き並へたるまでの者ざるを。疾く知るゆへに。之を見ることを。敢てせざりしが。近頃に至り。是に評破を試みよと。勸むる者あるに就ひては。岩代漫遊中に。伊藤何某か持てる書を借用して。始めて一二枚を閲るに果して推察の如く。人法躰一に濃き交せて。惡口罵詈計りなり。矢張捏造の邪屈に伏して。其云ふこと前後矛盾して。取處少きもあることなし。自分の知らぬことを。知顔して。出放題の底抜けを。寄合ひ書なしたるものなり。所詮紙數多く。啞法書を見盡すことに。退屈する如きものなれば。予是と見るに少しも暇無し。人を頼みて探索せしこと。二箇あるなり。其は

曰く。人法躰一の成佛せし人の證據と。人法躰一の成佛の説明とを。書中に見當らざる者なり。八章七十九節。其節目を並ふるも。予が破謬書已來。觀心論に於ても望む處は右二箇の要點を書かす。實に奇怪の曲せ物といわむや。假令千枚の紙數に雜言を書散すとも。成佛の一段を證するか一大事なるにも抱はらず。餘計の言譯をなすものは。到底人法躰一には。成佛せしものなくも。其説明の事理のなきことを。完く證せしに過ぎすといわむや。予が觀心論あるものは。其成佛不成佛を探偵する爲めなりしに。完く其要求に。應せる實品なきに於ては。論するに足らざるなり。然るに既に云ふか如く。此辯駁を人の需に應して。予を大ひに悟る處あらむとす。語るか如く。未だ觀心抄を徹見せずといへども。唯該抄を讀つ處は。人法躰一の邪觀のみ。此二點張りを以て。摧破を爲すへし。無謂き八章七十九節の餘論に涉らず。餘論を立てざるなりといふ。何となれば。章々段々に合手取らむとするも。本來法相を知らず。間違事斗を混したる捏造邪々なれば。是を直ふするには。宛かも腐敗物と手に取るに直す

ことを得ず。朽ちたる木に釘を打つに詮なきものゝ如きか。却て是を直さむとすれば誤解を生せしむるに至るへし。必用なきがゆへに。彼れが平素の邪觀を叩いて。一切に滅無に屬せしむる方策なり。單的に人法躰一を斷破すれば。此書を一喝降魔談と題したり。尋ひて觀心抄中の節目に見遁しかたき處を。二三箇打破せるものなり。觀者此書の曲會なきを了察して。人法躰一の邪觀を。摘棄するの要具となし。惣して邪弊對治の論法となすへし。此書の肝心は。法相を嚴正に。表したるか特色なり。故に第三末法觀心論とも名稱するなり。文段に至て其實相を知るへし。其緒言爾ありといふ

明治廿八年十一月八日

本門大師正嫡尊門生

驥尾日守

一喝降魔談目錄

辯惑觀心抄辯妄

- 人法躰一評破
- 道理
- 文證
- 現證
- 五百塵点所顯の法相圖表
- 人法躰一訛謬証の圖表
- 法相相配表示
- 人法躰一流の邪僻を許く
- 法相上より本因妙の純正實義を表示して僻輩が本因妙を穿つ
- 本因妙の法相と本果妙の法相と一同の事相を示す表
- 本有の法相を表示す

- 人と法とを細論す
- 法華性質細論
- 宗祖が御一身の性質を分判す
- 人法躰一の邪觀の妄信を許く
- 無作三身の實相を脱佛とをもふ僻見僻案を叩く
- 日尊上人建立の三秘の應用事理
- 一喝降魔談の結論
- 人法躰一の事理論圖表
- 辯惑觀心抄八章七十九節評破一喝
- 別評論二箇

一喝降魔談 一名第三末法觀心論

驥尾日守著

●人法躰一とふ。邪觀の啞法は。法相と及び教相にも。觀心にも適合せず。現證、文證、道理、なきを。此一段に壞滅す。今これ人法躰一を。正觀とする邪義を糺すは。先づ道理に適せざることを。責めざるべからず

●道理

抑も人法躰一を立る者は過りて。宗祖を本時久遠の本佛といふ。其謂れなきものなり。尋ひて宗祖は上行の再誕にあらずといふ弊なり。此二箇が即人法躰一邪觀の起因たり。尙更に靈山の壽量佛を本時の圓佛とは知らずして。脱佛なり。もぬけなりといふ誹謗

を起つるは本迹の別を知らざるの痴愚にして世間に稀なる邪教といわざるを得じや。それ天に二の日月無く國に二主なきは本有として一世界の通途なり内典に註する所たり知るへし。

亦それ一世界に二佛出現なしとするは然かも如來が說明として内典の掟なり。三世常住不變の約束實相印あるを知らじや。誰か佛教の實相を「」するものとして宗教といふもの三千大千世界にあらむこれ會て如來に許さざる所なり如何にするや。

日蓮宗も現在佛教部下のものなり。是れに數々會通を曲けて別佛を立てむとすとも。現在釋迦佛が所説の法華經を所依とし。天台の疏釋を依用とする以上は。徹頭徹尾教釋に毫程も違背すへからず是れ道理の動かさる所なり。お子程も異する所ありては邪なり苟も佛教の界一部の佛教にあらす十法界に干渉する佛教に於て卑屈なる理あるへけじや。現證、文證、道理に外れたる世有二佛を語りて世人を誑惑するは即佛界の賊たり。争か是れに相違あらむや世界中の佛者が是を許すや否や監みすむはあらず。

それ人法躰一と立る邪流は。種、熟、脱の三が分々別々となる卑屈あり。法相異なる僻見あり。教主別離する惡弊あり。法相と、教相と、の別を知らざる愚昧あり。是れ人法躰一者流の邪法たるを脱れざる所以なりとす。飽までも此道理の動かさるは佛天の證明する所たり。智者是を瞭せよ苟も予が稱道する。日蓮宗正嫡流は教相に一切毀傷を加へず。祖判疏釋を曲けず。多層贅白を要せず。常に三秘法相に照準する絶待實理を。以てするかのへに。正さに種、熟、脱、三益の離別を見す法相と、教主、を別々とせず。本迹混亂なきこと晴天白日の如し。是れ正法正義の証據なり。智者察亮せよ完く人法躰一は現に道理外のものといふことを脱れす。

今それ人法躰一を觀心とする邪惡を糾明するに於ては文證に適せざる義を責めすむはあらず

● 文 證

抑も人法躰一と立るものは。先聖弘通の方策を亂し教相に違背すること枚擧しがたし

大なる邪理ありて曲會私情の脱れがたきこと言語に盡しかたしとす。

宗祖曰く。法の邪正と師の善惡に於ひては證果の聖人尙是を知らず況や末代の凡夫に於てをや。と示し玉ひて人法躰一なむとの邪魔世に出現しては。世人是に惑ふ然りとす。いと。是を證明するものなく。一切に以て墮倒せらるるとも黙して今日まで過ぎ行きしなり吁々是れ世人皆時の不祥に遇せり。爾りといへとも日宗も之れ佛教者の部を出てされは法華とも世人云ひ傳ふる時は文證論に至ては少しも曲ることあたはず。現在宗旨の所依經の事實に相違するがゆへに經證を決して外脱することは許さざるなり。是を遁逃する時は破法者と云ふて論するに足らず佛者の與せざる所なりと斷言す。爰を以て今其文證論を立てむとす。

夫れ日蓮宗の本時久遠の法相を所立とするに之を教相を以て證せされは。久遠を世人知るべからず亦出離の趣きと涅槃の道を教ゆるにも教相を以て告げされは。假令ひ。宗祖が金言ありと喋々證すとも三世諸佛の實相印なくむは世界に一人も是を信とするものなく。誰れか是と用ひむや。是れ正さよ經證を專用とせざるべからざるの實論にして。世界の批判を求めても世人の賛成する所なり。輿論爰に決するは當然なりとす法相爾り。偕て文證に當て日宗は法相を探立すれば正さに久遠本時の法相なり。現に法華壽量教の三大事是なり即ち經文に是を允當してわ。

如來、秘密、神通之力、明白なり。

天台是を釋するに曰く。佛の自行の因果を以て宗とすと云。

妙樂是を釋して曰く。一身即三身なるを名けて秘とし三身即一なるを名けて密とす乃至於諸教中秘之不傳云々

宗祖曰く。此三大秘法の二千餘回當初み地涌千界の上首として。日蓮體に教主大覺世尊より口決相承せしなり今日蓮か所行は靈鷲山の稟承に芥子の相違もなき色も替らぬ壽量品の事の三大事是なり此文の下に一念三千の證文あり畧す看破せよ。

右は日宗當家の法相の現文宗致の玄妙なり此他に法相なし。是れ三益の利物なりと知

らむや。本佛が所有法主として一人世々に布施し玉ふ。故に本佛迹佛十方來集の諸佛を
實相印を加へた。第一義諦の法相たり。之れ常住として動せず。一念三千此他にある
ことなし(一念三千とは互具のこと
にあらざるを知らしむ)

右實相印を有せる法相に違反して無謂き人法躰一の邪々たる妄愚を作用して。上みは
諸佛を蔑り。下もは九界を誑かすものなり。文證一切を以て人法躰一にあらす

右に就ひて観る時は。實相證を烏有と爲し文上、文底、なむとの邪理を企設して以て三
世の鏡を剝らむとすとも佛天の許さざる所なり。如何むするや吁々

宗祖曰く。此本尊は時我及衆僧。俱出靈鷲山の文より出たり矣

右人法躰一の本尊にあらす本有無作の法相たると明々白々たり。何と之を欺くや如何
宗祖曰く。教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し日蓮が肉團の胸中に秘して
隠し持てり云々

右人法躰一にあらす。宗祖の本佛にあらす。現在靈山出現の本時無作三身よ。本有の法
相をは相傳したりといふことなり。焉そ宗祖か人法躰一といふ法相を自作せむや誰か
是に實相印を置くや其證あるべからす。人法躰一といふこと無文、無義、なり曲會者が
完く私作に出たり。上來の經釋、祖判、斷滅するが如何するや。佛者たるべきものが現、
文、理二證に外れたることを云ひ曲くるといふ謂れあるべからす。故に予は第一觀心論
全体のに互りて、外道と打つなり智者此理知るへし

件は尙も。宗祖御一期の御弘通の法相法華の規模たり。興上師資相承の法相たり三世
諸佛の誓ふ所なり是を誣ゆるものは法佛謗罪の苦長劫に流るといふ吁々
それ興上、目上の御弘通に於て人法躰一の御指南なし御一期生の御筆意に於ても一毫
もあるなし果して然らば。本門弘通の大導師が教示せ證跡なき人法躰一の邪觀を捏造
するは如何。

日目上人が。天奏上乃文證にもそれ
宗祖をして本佛と書き玉わす上行菩薩と証し玉へり若し。宗祖か真どの本佛なれば明

白に證し玉むるへらす。目上天奏を爲すに。

陛下を欺き奉るか朝敵といわざるを得ず。争か其謂われぬへからすといわむや。

此一點を以ても。宗祖を本佛といふことを許さざるなり況や經義を曲る外道の所言に

於てをや。

正さに知る人法躰一宗祖本佛といふことは。

開祖目上滅後に及て僻學者か斯かる威儀を惡巧したるものなり其所以は。兩上人御一

期の御弘通に適せず勿論證跡無し。此妄愚を貫かむとする妄信者か法相を知らずして

纒かに祖判を曲けて喋々するの笑ふへし。

彼の辯惑觀心抄に八章七十九節を置き節目を立て邪謂を捏造するは。所謂ゆる天台か

偶ま虫が木を食つて文字となるか如しの破責に的して是を信とするものは即ち馬鹿な

り。

宗祖を輕賤去奉り。與上、目上を慢侮するの道理を脱れず。頭破七分を知らざるものと

いふ。

右に證する當家の法相は。教義より出たりといふ實論的なり。十法界に貫徹するの表示

にして。天下無二の現世的論證たり。それ人法躰一者輩が文證を脱すること能わざる

の現罰如是し智者能く之を知れ。

次にはそれ。宗祖は地涌千界の上首上行菩薩たり。人法躰一者流輩は上行菩薩にあら

すとす。其謂はれぬへからす馬鹿なり。

其證文を出さし。

法華涌出品に曰く。一名上行、二名無邊行、三名淨行、四名安立行、是四菩薩於其衆中最

爲上首唱導之師云々。

右は本地を證する文的文たり。然ふして上首四菩薩が末法出現の文證は如何といへば。そ

れ善量品に説相を示したる證文に曰く。

遣使返告云々。

右は本佛勅使本化末法出現の的證なり。

天台曰く。遣使遺告とは今の四依を指すと釋せり。

次に法相を本佛より付屬乃證文を覺ひれり。

神力品に曰く。爾時佛告上行等より下。以要言之の四句の要文。正さに壽量の三祕事行口決の的文たり。

右は付屬證とす。次に偈頌に至て。

斯人行世間乃畢竟住一乘の文の如きは辱くも。上行菩薩先陣として本化の四依か純圓廣布せしめて未來熟の世までの諸佛戒の唱導の的證なり。

次に上行等出現して右述ふる所の法相を應用する時刻は藥。玉品に應佛が是を特り證し玉ひしなり。此文は證せずと雖とも夙とに學者の知る所なれば爰に畧す。然に上行菩薩の本佛より法相の實相を弘通せしむるの佛勅を奉命じ玉ひさりしゆへに。外用の經卷は弘通者迹化に讓る者とす爾りとして付屬が會てなきにあらず。既に囑累品の惣付屬

の上へにありて知るへし。ゆへに飽までも教相の依用とせざるへからず假令ひ。

上行菩薩が教卷を依用し玉ふとも迹化の天台とは介爾も同する所あることなし。本有の法相上に於て瞭々として明證なりとす。

右掲證する所は靈山顯示上の的證を表したり。偕て靈山の聽衆正像に出て末法の法相出現を徴したる證を出さば。

天台は後五百歲遠沾妙道と釋を作り。

傳教の正像稍過已末法太有近法華一乘機今正是其時也と釋を遺せり。

右は靈山の聽衆殊に外用相承の師たり。即ち上來證したる壽量の法相乃末法に入りて上行菩薩が現出し玉へるを豫知し玉ひて告げたる証明なり。是等は在世と末法との中間の證票たり。

偕て末法に入ての證票を出たさは。

上行菩薩出現して正さに心理より法相を興し玉へる文證分。別功德品に曰く。頂戴如

來云々

右は。無作三身如來が常寂光より現れて上行菩薩に本時の法相を告げ玉へる祕傳の的文なり。

右の事實を天台は前佛の法華經を宣揚すと釋せり。

以上は佛在世、正像、末法、の始めに涉ての的證なり是等を以て顧みるに會て。

宗祖は本佛にわらず。上行菩薩の的證、動かさる實相印の確證蕩々たる上行菩薩なり。

是をして有て無きにするといふ人法躰一の邪見者流か如きは盲目なるか發狂人なるか

。恐らくは佛天も許し玉へす智學のもの、與みせる處といわむや。彼乃妄信者が言を信

とせは。恐らくいられ經文は一切反古とならむ本佛、迹佛、等の諸佛が實相印は反古よ

りも墓なきものなり。一切世間に成佛の証據は無しと斷言せむ耳み。争か其義あるべき

其所以は人法躰一の証實相なし。人法躰一の成佛の證跡十方界中になし。一念三千の

成佛は人法躰一の成佛にわらざるかゆへなり。彼等か無證、無實相、無文、無義、誰れか

信せむ唯妄信輩の戲言に止るといむ耳み。

宗祖曰く。在世の本門と末法の始は純圓一同と云々。

是れ人法躰一の本尊にわらず。本時の法相か彰れて純圓一同といふにわらざるを解すへし。

亦曰く地涌千界出現して本門の釋尊の脇士と爲りて一闍浮提第一の本尊此國に建つへ

し云々。

右は本化の四依が出現して本時の法相を顯示し在世の本門純圓一同を募るれ主義を証

し玉へり上行出現の的文にして本佛出世れ主義にわらず。

亦曰く末法今世の番衆は上行、無邊行等にて御座しますなり乃至上行菩薩の御利生盛な

るへき時なり其故は經文明白なり等云々。

右上行出現して本有の法相を興し玉へる的文なり殊には上行の利生盛なりとあり經文

明白なりとあり吁々本佛出現の的文なし。祖文に本化上首が出現の的證枚擧しかたし

本佛出現の文證に於ては明文なし若しありとするものは彼等が完く曲會捏造に化ける

ものなり果えて教證は滅無すへし既に上來陳るが如し。それ段々に證するが如く文證論に望むては人法躰一本佛出現、上行出現の判證、審裁に於ては一方も勝利を得る所なし。彼等が吐く處は教外の詐致に出る耳み誰れ有て是を法華宗といわむや。殊更に文證實相を捨て、出離の趣きを知らす。涅槃の道を辯へざる無懺、無愧、の徒と斷言を呼々憫むべきかな。

● 現 證

抑も人法躰一を正意と爲し本佛を知らず。宗祖をきて本佛は再誕といわむものは正に。當初の法相を知らざるの無智、無學、に起因きて付佛法の外道ともいつて。其謂はれなきものなり是を糺明せむには法相を嚴正にして責めざるへからず。され法相に暗きものは本來本有の佛法を知らず亦佛陀如來の實體容相を知らざるものなり。將復た成佛の實を知らざるものなりとす。

今是を以て是を顧ふに中古の學者か此法相に聞く自己の都合の宜しきを以てする時は教相を助行とか傍とか云つて之を依用とし。自己の都合を以ては教相なりといつて是を捐捨す。良とに其所爲に於けるや法相に昏昧なるに因れり。尋ひて教相教理に疎なるのゆへなり。今也本因妙の無教の時にしては。本時の法相を正ふして化他一切に通即したる教義を盡し偏頗なく一念三千に照して文字論をなすへからざるものなり。所以者何むとなれば本因妙の如きは法相を起首するかゆへなり。是を換言すれば正に本有の心理より出興したる法相即ち實相なるかゆへに文字上に携はらす。直ちに心理に入りて心理一面を用ゆといふ是を法相といふなり。今其法相を表示す。

夫れ法相とは本來本有の心理の儘の容相を法相とす。是を義解するときは。如來と唱ふ其如來とい絶待の如來を指す。其絶待は文字教に委ねず本有の實相如來を指すなり。今其的據を求めは取りも直さず法華壽量の如來是即本有の三身如來にして法華の實相如來とす。願ふよ世人一般聞者たり聞者は守文の諺にして法華といふことも如來とい

ふことも壽量といふことも皆是れ法相即心理とは知らずして文字に取扱をなせり笑ふへし。豈に知らざるへけむや法華を讀むもの此法相の形貌か大切あることを手に取らざるへからず。

妙樂の曰く。壽量品の佛を知らずむはあるへからず乃至壽量品の佛を知らざるものは不知恩の畜な生なり云々と釋し玉へり。是れ壽量の如來の如きは法相にして所顯已來此土の有縁甚厚の教主なり。故へに今の釋に知らざるものは不知恩等といふなり。

天台は不識天月但觀池月と釋し玉へり。

右等は壽量品に如來を知らざるものをは責めたるものにして守文者の誠めともいむるか。又文字の法師とも云ふ今其本有の法相を指示せは畏くも。

發迹顯本の時に顯示し玉ふ壽量の三如來ハ一念三千にして本有の法相たり是を本佛とも本門の本尊とも數々と異名を置くも皆實相に付帶したるの名なり左れば。抑も塔中の妙法五字は有のまゝある法華の實相なり。左右の釋迦多寶の二佛三佛は是

れ

如來壽量品なぞ文字にあらす實相なり是即本有にして無作の法相なりとす。

右の妙法と無始の三如來とは法華とし是を説く如來は本佛なぞ是を皆是眞實と証明する如來は本佛なり是を説いて九界を濟渡するの應同神通するハ特り本佛なりゆへに。

天台証明して曰く壽量とは本時三佛の別號なりと釋し玉ひて現在靈山へ本佛が出現し玉ひたり。其證據は九界既に件の法相を實觀之拜し奉りて脱を得たり是れ本佛が出現し玉ひし證なりとす。此法相に就ひて觀る時は會て。宗祖が當体は佛體にあらす本佛に座しまさざるの嚴證とす。是れ世界に二佛出てさるの現證たり。殊に亦本化の四大菩薩が出現して八品間に證明するは。第一本佛が出現の證明と。第二には末法に入ては上行出現の現證とを告るの爲めなり是れ法相に正しき處にして隠し覆ふへからざる現證なり。是を。天台証明して曰く三世化導惠利無疆と釋し玉へり。

右を以て了簡する時は。然かも靈山の法相は本佛が興し玉ひし法華實相にてあるなり。其證は九界か脱を得て一念三千の成佛を遂げし處か現証なり。次には本脇士は必ず本佛と片時も離れ玉ふことあることなし是れ法相なり。靈山に本化が現れ出るの本佛か實相證の疑はざる所なりゆへに是を以て本佛出現の第二號現証とす。これ即法相の証ゆへからざる所にして法華の實相印の証明する所なりとす。此實相を曲くるものは天魔の外あるへからず。然るに此法相の時は魔王も來示して本有の尊形となりたり此事實をり。

傳教曰く一念三千即自受用身自受用身即一念三千自受用身とは出尊形佛と釋し玉へり。

是良どに法相は常住にして無始の究竟實相なれば證ふへからざるものとす。右現証に就ひて觀る時は斷して人法躰一の實相といふものなく法相に照せは忽ち邪とあるものなり哀むへし。龍樹菩薩の曰く法相を法相の如くに説くを如來といふと釋せり人法躰

一の一念三千とならず法相に合はず斷して佛か人法躰一となりたる實相なし。是れ并有の法相心理に人法躰一が適せざるを如何む。左れば人法躰一といふ邪々は法相を知らざるかゆへに想像より成立ちたるものなり。本佛の末法に入りて凡夫に下生するといふも本有の法相を知らず恒に本佛の所在を知らざるに出たる愚昧なり。其現証は既に指示する所の法華の實相に暗く亦壽量品の何物を知らず恒に脱なりとて疎縁に爲し居る事實に因りて見れば明かなり。現証既に爾りとす。

右並陳する如く道理と、文証と、現証とを三証を以て監査する時は正さに大石日應か所立の邪觀。即人法躰一なるものは。大妄想なり。其ゆへは一念三千を忘れたる馬鹿邪々なり。全体に成佛の一段をは忘却したるものとす。論するに足らず智者是を了せむか。件三證の結論上にて人法躰一の妄愚はを壞滅せしめたるなり嗚呼哀れむへきかな

圖相法の顯所點塵百五

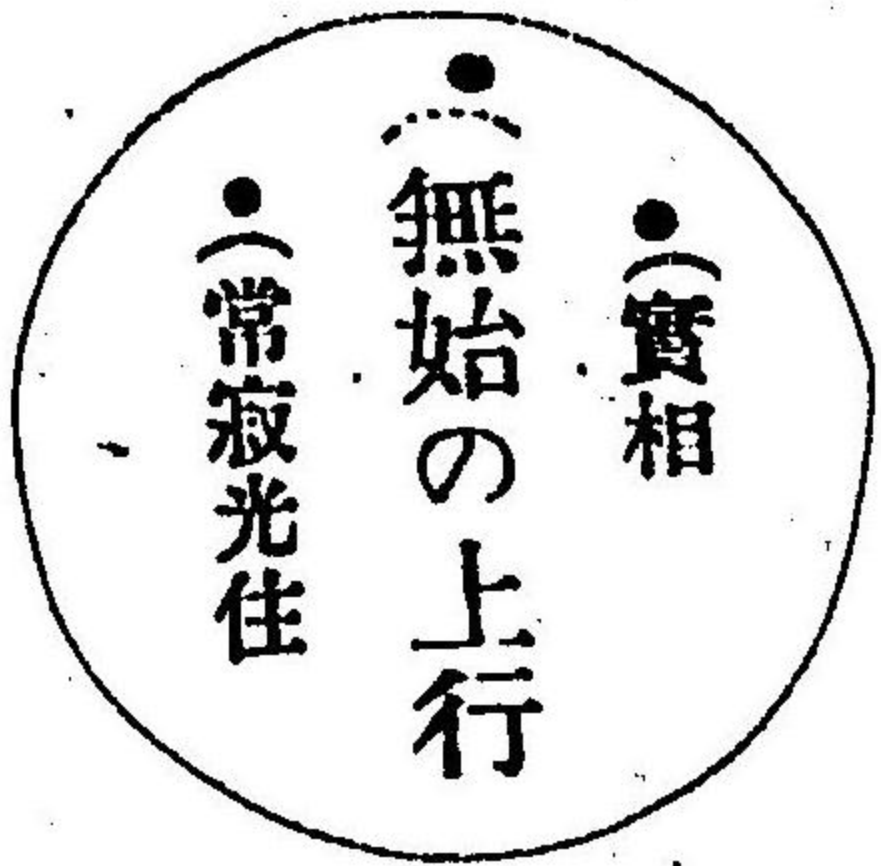
●(本來本有の佛法の實相を表示す
●秘密なり



●全なり



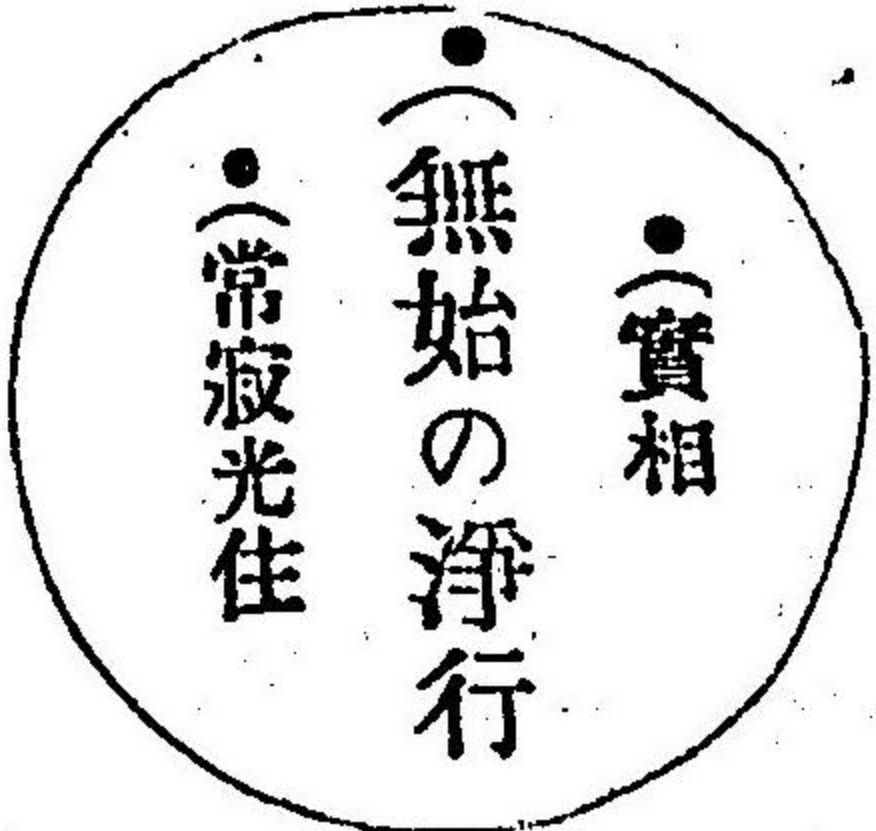
●全なり



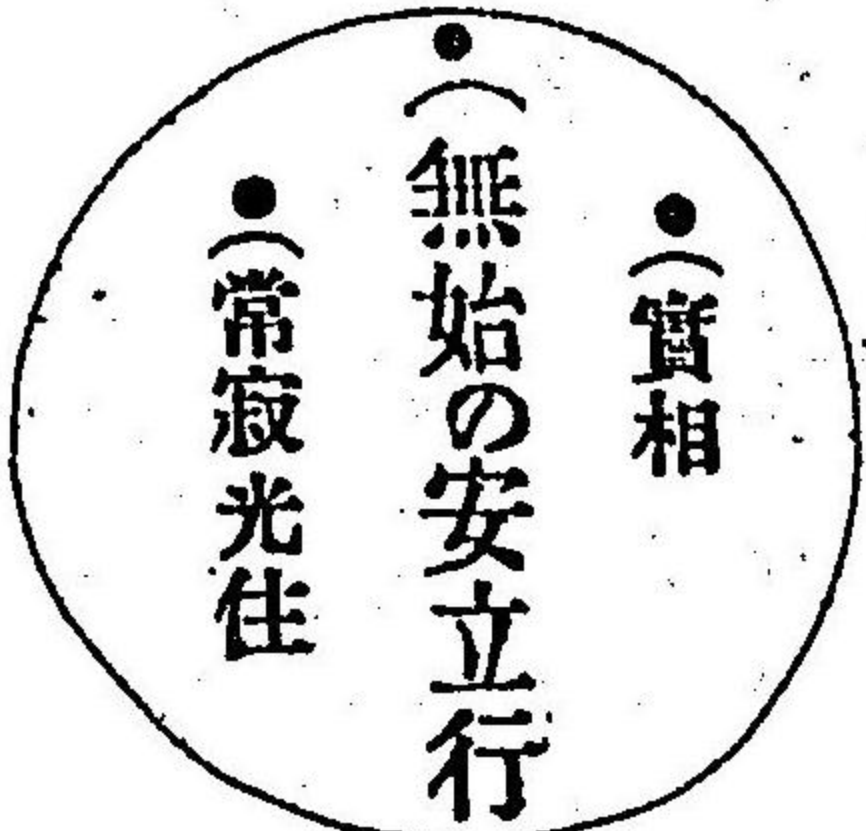
●全



●全



●全



右表示する所の圖象は。是れ本地難思なりとす。且らく五百塵點を語るも。其實本有無作なり。其五百塵點の數量を語るものは他亦し。所顯をいふものなり。管に常住とす。

宗祖曰く。五百塵點所顯の三身にして無始の古佛なり云々

左れば此壽量の實相を以ては非情有情の活動するを知り。一切に佛性を備足して居ることを了知するものなり。正さに。此法相の、法華と、四大士、か無りせば一切物一日も存立すること能わす。爰を以て願ふに。世界は壽量の一念三千の爲めに常住なるものなり彼の。方便品に。是法住法位世間相常住と説くは。此法相か世界に住し玉へるかゆへに。世界物一切常住といへる意なり。亦壽量經に、我此土安穩、と説けるも。同一のことにして一念三千法界中に蘊在せるを以て皆端正なるものなり。彼乃四季乃循環の如き。日月の運行乃如き。世界に作々發々の者一として。右法相の神通妙活動力にあらざるなしと結歸するものなり。既に草木成佛を法華の力用とするも。此實相を以て

証したるか事實なり故に有情成佛は勿論なりゆへに。介爾有心即具三千と釋す亦。草木瓦礫といへとも佛性と備具して終ひに成佛するといふは。不思議にあらすして現在實相に就ひて明白なり。釋に「一草一木一礫一塵各一佛性一因果具足緣了といふ。皆是れ右法相が俱体俱用なるかゆへに其佛意成就の因果を結ぶものなり。若し此法相が同一に具足。玄玉むすむは何を能く有情一切平等に成佛することを得へけむや况や非情に於てれや。世人一般に今日法華は有かたしといふは文字のことにあらす此實相の力用即法相の嚴に利益し玉へるを感じて知らすといふことなるかそれにも抱らす。此大事をは教ゆる其門跡に居しなから此本有の法相を知らすして。恣まに此法相を有て無きにして謂われなき人法躰一の妙法を捏造し証據のなき本佛を偽作して衆人を誑惑するもれば自他の不幸耳みならず本有の法相を毀傷するものといわむ此罪報を如何む。予が今爰に此圖象を表したるもれば人法躰一は法相にあらざるを証し以て一切の有情、非情、の實相の形貌を告たるものと知るへし。而ふして此實相を了知する己上は

此法相を以て一切世間の情非二世間の本有常住の五重玄といふことを知覺せざるへからす。是を換言すれば五蘊、衆生、國土の此三種世間の主宰者といふ義なり。正さに此主宰の實體か二千餘回當初に現出したりといふなり是をは衆生に教ふるに言を換へて法華壽量品と稱す。

宗祖曰く。一切經の中に此壽量品座まざすむは天に日月なく山河に珠なく人に神の無らむか如し云々。

此法相は靈山に出現するも靈山とみるにあらす本有の久遠とみるか本理なり其故に。

妙藥曰く。雖脫在現具騰本種云々。

宗祖曰く。十界久遠の上に國土世間顯わる一念三千殆と竹膜を隔つと云々。

如是く本旨の法相なれは靈山に約せず本時所顯に立戻て本有を明すといふ義論なり。今日本因妙を興すも亦爾り此法相を以て本實成の靈山より直くに久遠本因へ具騰本種と立戻て本有を明す是即因に復し果が因に具攝するに約す是法相の世間に循環するを

指南するものなり無作の實理にして誰有て是を成するものもなく法相の然る所とする
 なり。爰を以てのゆへに如來は此法相の中に住し玉ひて法相循環の時を照見し三益を
 測りてよく衆機を度し玉ひ既に未來の熟は彌勒なりと今より必定せしが如し法相の常
 住にして諍ふへうらざる所茲にあるなり。前論にを已てにいふが如く如來か種、熟、脱
 、三益を促すものは別々の法相にわらず同一の法相にして異なることなきものなり衆
 機に於て即種と、熟と、脱との三別あるなり。若し然らずむは成佛の種因なるものか何
 箇もわるものゝ如し一念三千第一義諦が何箇ともあり亦絶待が何箇とありては本佛も
 常寂光も何箇もなかるへからざるものなり。正さに知るべし前に掲げたる法相は十界
 身具の法相にして人界一部上の與るへき法相にあらされり三益一に以て此法相か應用
 するなり此法相を主として利するものは唯本佛一人なりゆへに本因本果の法主と尊稱
 するなり。左れば此法相の實形を知らざるもれに於ける或は本因といへば因計にして
 果のなきものと思ひ亦本果といへば果計りと思ふ者あるは即法華の右に示す實相を伺

こす未だ法相に暗きかゆへなりと知るへし其所以は現在。

法華なれば因果が連束せされは蓮華なりとすることを覺悟せざるへからず。それ本有の
 妙法なるものは本有無作の違あり因なり亦本有の三如來は本有無作の開敷の華あり果
 なり。是を佛意の因果といふ。

恒には是を法華と唱ふ法華は之れ因果の異名心理の容相を稱するものなり實相を見よ
 因と果と離れて居ることを知るへし。其れ心理中に此法華の心理か住し座まして常
 住不變に異同なく一處に連束し玉へり故ゆへに並常因果不思議を稱せるものなり。其
 並常の姿に於ける内證壽量の外に外用の壽量あり外用の壽量の内部に内證壽量座まし
 て内外に表して離るへき法相にあらす。

抑も塔中の妙法は内證壽量にして釋迦多寶の外用壽量を左右に置く外用壽量の内證壽
 量の外とに隔つて座すす即釋迦多寶は妙法塔中には左右になりて其實相を證し玉へり
 是を即。法(妙法)。華(釋迦多寶)と唱ふ亦は蓮華とも因果とも稱せるなり。是良とに色を

離れて心理一面の法相たり會て之を色心二法なむと見るへからず現在心理に因と果と連束して一ならず因にも果を具し果にも因を具し共に並常蓮華なり因より出たる果にわらず果より出たる因にわらず宛然たる蓮華なり右示すが如く本因本果の實相が靈山虚空會の儀式の實相なり爾かり。然ふして熟脱の衆機のものは此實相を觀見して件の因果を心理に結了したり。將た下種の時は此實相を觀見せず然れども此法相を執るに宛然因果は結了する實義あるものなり會て果の時の實相に毫も異せず同一とす。然りといへとも已てにいふことく本因妙を修せむといふものは因斗り修するものとし久遠に於て本佛が實修の時は本因といへは因斗りにてありしと感想するものあり。亦果を云ふも乃ほ本果の外に因わ用なきものと思想を専ら疑らす者あり皆是れ片相好を觀るものに似たり滿面を觀見することを知らざるが如し。法相を知らず實相に就ひて様子を伺わされは眞實の本因果を執ることを損失するものなり憶わすむはわらず此れ一大事なり。

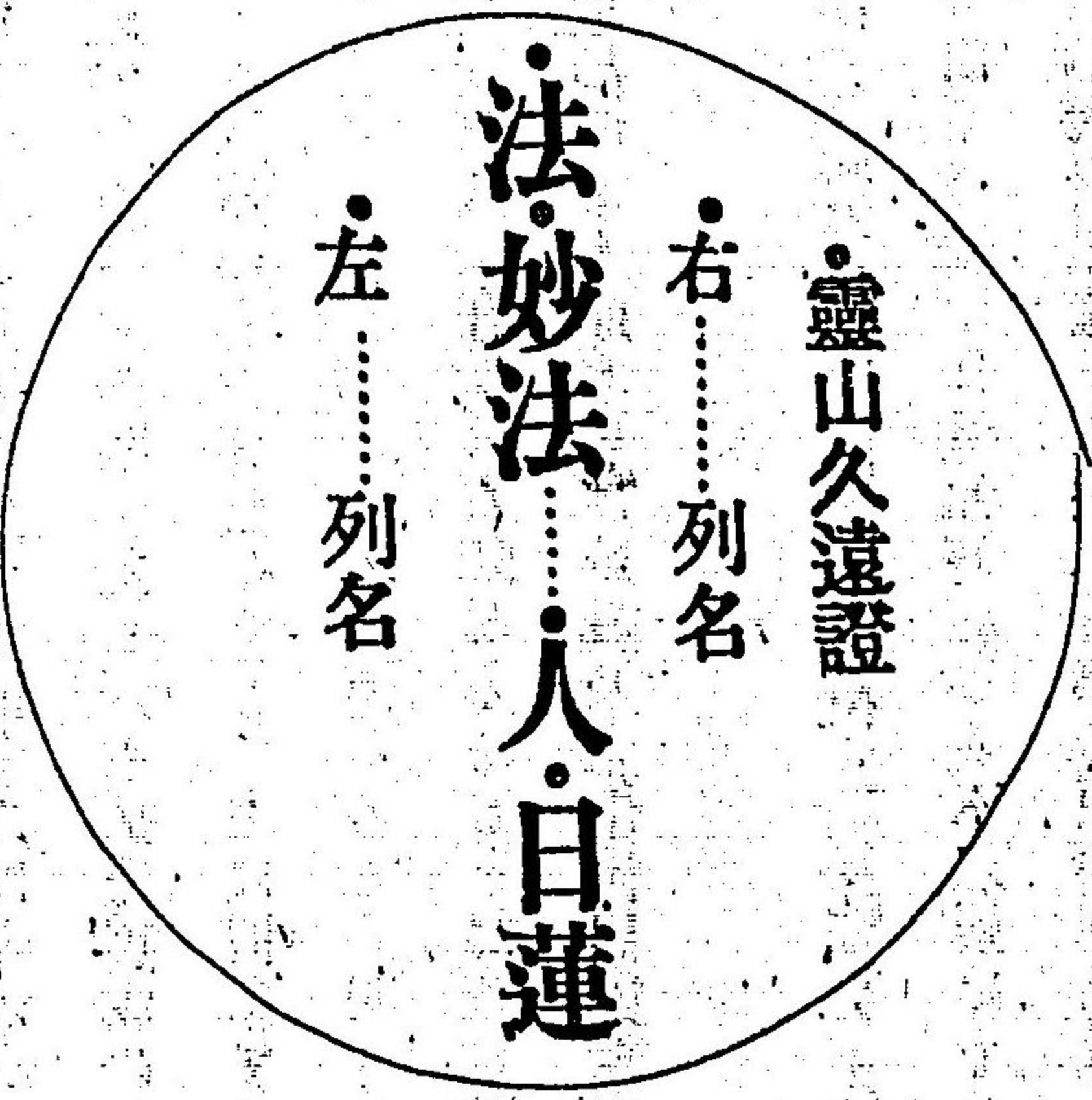
宗祖曰く爾前迹門の十界の因果を打破りて本門の十界乃因果を説顯す是即本因本果の法門なり等云々

正さに靈山久遠顯本には本因の實相と本果の實相と並常因果即蓮華を示し玉ひしことを明証し玉へり。今也本因に復しては前佛の明示し玉ひし實相を内証壽量に興して顯示し以て三大秘法と尊唱す是れ良に本因の實義なり會て因斗りにわらず因果兩義あることを習わさるへからず若し此義主を取違ふ時は一念三千に適せず敢てそれ教主を離縁することもわらむ然れども。教主の過ちにわらず自己が明師に遇せず明師に逢ふも愚にして信せざるに依るあり往ひては成佛の肝心を失敗するに至る能々法相と探究せざるへからず

宗祖所顯の法相を愚昧にして習知せず徒らに文字摺に泥着せるかゆへに人法躰一なる誑法を偽作して。本祖が御弘通にも相違し尋ひて開祖が一期の御遺書にもわらざりし人法躰一の邪屈を捏造して愚人を惡道に引くこと彼の佛惠比丘が威儀の如し法相をは

横世になして衰れなるかな佛威に因らす是を破佛破國の因縁といわむや敢て罵詈には
わらす其罪を悪てなり唯本有の法相が地に陥ちたるを悲しむ世人此人法躰一の邪惡を
知らずしてこの妄信を可とするを防ぐために此難破をなすなり智あらむも乃此れを推
せよ。

●本化本尊を僻見して人法躰一と訛謬するを証す



情々願るに

宗祖所顯の妙觀(本尊の)は二千二百三十餘年之間未曾有之大漫荼羅也と證認し玉へるを以て明知す。靈山會上八品所顯に約したる久遠實成の本化本尊なり雖脫在現具騰本種の妙觀なり是を本因妙の本尊とせむとして右に圖象するが如く惑者が人法躰一と誤認せし其妄痴なることを笑ふへし。不相傳なること明らかなり。今その愚妄を證せば正さに知るへし現在書入に在世の本尊なることを記証し玉へり(佛滅度後の文)。

御義口傳下壽量品の下も此本尊は時我及衆僧俱出靈鷲山の文より出たりと證し玉ふなり。

亦本尊抄にも曰く。此本尊は在世四十餘年にこれなく八年の間にも唯八品に限ると云々日如御前御書ニ曰く。爰に日蓮如何かなる不思議にてや候らむ龍樹天親天台傳教等たにも顯し玉わさる大漫荼羅を末法二百年の頃法華弘通の旗印として顯し奉るなり是完く日蓮が自作にあらす多寶塔中大牟尼世尊分身の諸佛が摺形木たる本尊也等云々

御本尊中の御證明と云ひ掲ぐる所の三證等を以て觀る時は壽量教の正さに法相たること詳々赫々として動くへき理のあらざるにも抱らす。本有れ法相を知らずして。單に人と法とに節約して畢竟しては法も空の法となし人も單に色相空となして人と法と本來性質の異なるに於けるも知らずして終には人法躰一といふ邪漫の空々に陥れり口に本地難思を云ふも常住と云といへとも其實なし。法といへとも法に於ても種々ありて概して法といふことを得べからざる實理あるなり人といへとも人は即色相にして法即人人即法といふことを悉す其現證に於ける正さに知るへし。壽量の法相に照らして明かなり。其意はそれ。本來本有の妙法は是れ獨立なり。絶待の上みに居せる心理なれば諸佛の本師なり。殊には本有無作三身如來乃心理中にて色心を分判せり。此事實をは色香美味と教相に告げたり心理に色心を顯示し實相を証せるの壽量教にありゆへに假諦の色を以て三身の心理に相對せず況や上みの絶待妙法の心理に假色を稍相對することを許さむや是れ本有の性質別異にして躰一といふへき實

理なきと決定す

●假りに法相の相配を表示せむ

それ無作本有の妙法は本地難思の修徳の佛意なりゆへに本地の二佛の其上に居して一念三千なり。無作三身の師なり。絶待心理の正位を占めて。無作三身如來と相對せず故に獨一法界と唱へて即三千種の心理を惣す。

それ無作三身如來は本有乃古佛なれとも五百塵點に所顯して其上みの本因實修を證して結果の尊體を表彰す是を佛色身の始と爲し尊無過上とす是れば是れ心理を尊形佛とす故に一念三千の佛と唱へて決して色相空假と相對せず法相の許すへからざる所とす亦それ色相空假の如きは一念三千の力用なし無作三身如來は色相を利益するなりゆへに色相空假は法相に位せず一念三千外とす唯是れ妙法と無作三身如來と此二箇の一念三千とす佛意の心理なるかゆへなり。

それ色相の人躰は空假に屬して中位に居せず法相に支配せらる永く体一ならず其ゆへ

は壽量品の三如來と涌出品の本化の眷屬とに於けるが如く現在名躰永別の實相にして色心一致ならず本化四大士の如きは心理如來の脇士として色心を別相に示せり此事實に就ひて人法即一の邪なること天日よりも明かなり。復るれ義の分界を表せば尙も實相顯示の上には尊ひかな

寶塔中の妙法五字に即萬法の因果を具足す一念三千悉地を成辦す義は無量の實義を宛然として備へたりとす五重玄義也塔外の無作三身如來の心理三千を惣攝して即ち妙法心理と相即し以て一念三千たり心理に色心を分割し體用を殊にして三心、三身たり是を大法とすゆへに殆ど人と色相と境界を異にするものなり

無作三身は脇士の如きは國土世間に相即して心理の資格に居せず即空、即假なり無作三身の如、智に懷抱しに此極地に住すれば始めて心理の實相を示すものなりゆへに法相外なり外色にして法分に位せず五重玄の配下なりとするなり
右示すが如く法相上にも、義相上にも、實相上にも、人は、法に、省かれて躰を別にせり

焉そ人法躰一と云ふの理ならむや宛かも水火の殊別よりも尙甚しく違せり。左れば一念三千心理中に於て主宰する所に心理が。四種に大別し。科段に至りて。二種となり。二種又各々二種とす。二種中に於て。一種は三種となりて。三種亦各々三種を別するなり。心理の法相すら以て既にいふが如くに性質を差別せり。何ぞ此性質を一種にすることを得うへけむや。唯法相の本有自然なりといふなり。

爰を以て、人と、色と、の如きは常住不變にして即法と隔別するなり。件に宛て、論して觀るときは曾て人法躰一とする品なき。是を無謂く一とみるときは忽ち人も法も死すものなり。人法を死しては遍即を壞滅して其極は利益も感應も神通も見ることもなく法佛を信するに足ざるものなり吁々訶ひて非を現わし見れど如是く哀れむべきものなり。有智のものは人法躰別を知りて争か躰一と云ふことを信せむや思わさるの甚しきこの啞法を如何。上來宣ふる如く法相にも、實義にも勿論。實相にも、人別、法別と其現相を知見に與へては斷えて從來空假の取るへからさるの捏造を抱へて死物の邪と

知らずして茲に成行きしものなり。懺悔して正に歸伏すべきものなりといふ良とにそれ以れば即法華は心理一面の法相を法華とす人法性質異なるを一とせむには法華にあらざるなり人法躰一のもの此實理を知らむや。所詮躰一のものは法とは名けず絶待の實理と破廢して實相印證明者なければなり凡夫が空想に出て、必ず智學の者れ笑ふべき虚戲なる耳み

●人法躰一流を立るもの、邪弊を許く

- 一 人法別なることを知らざるものは地水火風空が即妙法五字なりと空想するなり
- 一 地水火風空と云ふものは法相にあらず色即是空空即是色といふことを知らざれば法を忽ち空と爲し色は即法なりと思ふて空假の肉体を無作三身となし心理の尊形を無作三身といふことを知らざれば誤解より取て凡夫肉体を無作の三身とする大禍ありと知るへし
- 一本因妙といふことの佛意を興すの始めをいふもつといふことをすといふときは本因

妙と本果妙と其別と了簡せず全体に性質を別にする破法が出来するものなり
一人法躰一を邪見にありと知らざる限りは一念三千を到底知見せず往ひては常寂光を
知らざるに結歸す

一人法躰一を佛法とおもふものは一念三千の成佛なるものを斷して知るへからず
右の科目に就いて見る時は忽ち實相を害せることを知らず魔の現証といわむよと名け
やふのなきものなり是を顧みざるは魔心愚心の至りなり吁々

●予か法相上より本因妙の純正實義を表示して

僻輩が本因妙を穿つ

世人知らむや今日はそれ末法無教の時なれば當に一念三千相即の實觀を各々當體に證
知せざるへからず。今其容相を指授せむ。抑も過去前佛が説き玉ひし教理といふもの
も。其亦説法し玉ひし如來といふものも。皆是れ今日は一念三千となりて。各々已身
に住せりといわむや。若しそれ件の正觀が實義ならば取りも直さず本時二佛三佛が自

行は本因妙に適したりとす。曾て是れ無作の法相にして。惣して法佛わ已心の三千具
足の佛意なりと結歸すへし。此實理より推及すれば。本因妙は即本佛が已心中の有
の儘なる本地無作の三因を興したまひしこと明りなり。曾て地水火風空をして即妙法
五字と觀せしにあらす。我身を即座に妙法なりと開悟せしにあらす。彼乃吾魂魄を墨
に染め流したりといふ義主も此奥に入りて考へみるときと敢て難きにあらすとす
然りとすへとも。全体人法体一者流の邪僻として。語る所の法門らしきもの一切皆
法相にあらすして。唯文字摺のことを吐出するまでなり。其奥義を採取することを知
らす。ゆへに聖人が御法門上に方便を以てし玉ひし箇所をして法相の義主を法門に
取りて示し玉へる者といふことに了知せず。文字の皮相上より他に證することを知ら
ず。此故に法相に觸れては宛かも外道が語る邪々に似たるものなり。それ
釋にわ介爾有心即具三千といふ短語あり。是れ本因妙の起首にして。此法相より出て元
初の聖人が。正さに佛意の因果即本有は三因を。薰習し玉ひしものなり。右はこれ本

時の如來が觀心にして。この一念三千觀を普く情非二世間に及して。立觀し來れり。尙も十法界は且らく置ひて。人界一部上の法相に取りて監みるに。現世宇宙間の、日月、山川、人畜、艸木皆是れ一に以て一念三千已心具足のものにあらざるはなし。果して然らば、妙法も、如來も已心の因果に相違なきことを了知すへし。此實理より取て推測すれば。大体に此一念三千の法相實理の如きは。本有無作にして。上みは佛界より下もは三趣までも。皆是れ同一の法相を懷ひて。前後もなく高下もなし。互ひに本有無作の一念三千具足の實相實理体なり。蓋し元初に於ひては此一念三千を。實觀事行の先達を試みて。他衆に教示せし聖者は。本有の法界より取りて觀心を教しへたるものなれば。曾て教主が自己の一念三千を與へたるものよあらず。各々人衆が已心に有したる本來本有のものを取出して。信修することを懇示しよるものなり。豈に一迷先達と云ひしは宜へなりといひや。亦日蓮が魂を書流して候と教へ玉ふも實なりといひや。日蓮が心は南〇經に過ぎざるわなしとの玉へるも法相然かなりといひや。

先達が辭に隨ふは法相の然るがゆへなり。自己が物を與るは先達にあらず、法相に適せずして一念三千とならざるなり。是を悟らざるへけむや。

第一義諦の實理が忽ち亡滅すべきなり。豈守文者たる者之れを看過して可ならんや。今それ現世末法は。彼の過去久遠に匹的して、事行の振舞は毫髪も違せざるなり。此時に當てや、正しく介爾有心即具三千の法相を興すべきは本因妙なり。先以て今日は本因妙を論及し。次に下種といふことを了せざるへからず。其本因妙とは本時の圓佛が實修の始め。已心内裡の佛意の因果を發揚する因位不可知的を本因妙と名く。且らく本佛が因行の原始に約して本因妙と名稱を置くものなり。是を換言すれば本佛が自己の因行を本因妙とす。若し之を法界本有の佛法とするときは、無作本有の妙法とも。已心の妙法とも、本地難思の妙法とも名稱し、以て心理の大法とす。本因妙は即本有の觀心なり。觀心とは佛陀が心理を究尽し玉ひし時の名唱なり。重玄に入りての名を稱する時は一念三千と唱ふるなり。蓋し此一念三千の名義は心理一切に亙るといへとも

且らく本因本果共に佛意に約して十界互具の理性に涉らす。單に如來が究竟上の心理一圓とす。此義をば、妙樂大師は、世間の學者、互具は知るも、互ひに徧することを知らずと告げ玉ひしは、即此義を指す。苟も本有の内證觀心の妙法即本因の一念三千に於ては不思議の境界に住して。凡智の夢にも了簡すること能はざる所以のものなり。故に本來法界所有の佛意されども。本有の因行を起首し玉ひしは特り本佛にありとす。殊更に本因妙の因位を修することは。劫數長遠にまで、本佛を除き奉りては餘佛に於て此實修を遂げ玉ひし佛陀はあらず。爰を以て本佛に譲りて、管に本因妙をば本佛自行の因位と稱するなり。偕て下種の文字に於ける。是は法界に干涉せず。如來一人の所有の法相にして。既に云ふ本佛が過去に因行を修し玉ひ、果が満ちて、特り寂光に居し玉ひては、正しく自己が因果の二法をば。法界の衆生に施與し玉ふ御誓ひが。即下種の所以にして。三益の始めに位ひする本因の絶待下種是なり。蓋し本因下種と列ねて常には本因下種を唱ふるかゆへに因斗りと了簡違ひするもの餘多あり。若し其誤解に

望まは本果も亦果斗りを接待するかと思ふならん。何ぞ其謂われらむや。本佛が自行因果の二法の實相に就ひて觀解を爲すべきものなり。茲に此不了解ある時は、法華の法相を死るすものとす。左れば三益の始め本因妙を修せしむるに。已心の佛意因果を顯觀せしめ、是れに加ふるに。本佛が究竟の實相の上への因果の二法を戴仰すれば。本佛の因果は即果滿の因果なるかゆへに。忽ち受持せる者は成果の實義ありとす。此故に下種を興ふといふなり。今下種といふことをば。是を換言すれば本佛の成佛し玉ひし佛因佛果は二法の心理をば、衆生に施し與ふといふ義にして、世界悉檀に約すれば歡喜の益と唱ひて、長者の一子が父より身代を付屬せられて、之を領納したるか如き者あり。此比例の事實をば。

本門大師の御釋に曰く。釋尊の因行果徳の二法を、妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字と受持すれば自然彼の因果の功徳を讓與へ玉ふ、四大聲聞の領解に曰く、無上寶聚不求自得云云、乃至其跡を紹繼し其功徳を受得す經に曰く、須臾聞之即得究竟阿耨多

羅三藐三菩提とは是なり矣。

此實證の如く本佛の自行の因果を、受領する事を下種を授かるといふなり。本門大師は久遠本佛が慈悲より取りて、本有の法相を教示し玉ふ其實理明々として尊奉すべきものなり。誰れか本佛の下種を受領せざるものあらん、若し此下種を領せずとならば、自己が實力を以て、本佛が自行因修の如くに、五百塵點劫數間積劫行滿まで運動せざるへからず。甚此事は難しとす。ゆへに本佛が接待して、三益を實施すといふなり。此三益をば辭退するものとは、下種退轉といふ。無止自業得果にて五百塵點劫、若しは三千塵點劫を経歴して、生死は苦を見るといふなり。例せば在世の舍利弗目連等の如きにありとす。所以如何ひとなれば佛意の因果を獲得せざるに因る。夫れ人成佛といふことを知らず。成佛と云事は、己心に因果の心理ありて、其因果(佛意の心)を結了することをいふなり。是を換言すれば、自分が心理中乃蓮華(法華の心)を開敷して法界、三種に徧する如來(理智)となることを成佛と云ふ。一層高尙に云へば、一念

三千といふなり。此實理を知らざる時は、往生とか、他界へ轉生すること等を成佛といふを誤りて想像する者なり。然れとも、聖人も一念三千の成佛にあらざれば、有名無實の成佛なりと、教示し玉ひて、成佛は一通りよりあるへからず。鬼に角本佛か成佛と直ちに習ふべきなり。然らざれば成佛の實なし。餘行は虐戲なり。爰を以て、御大事に曰く。久遠實成名字の妙法を餘行に渡さず、直達正觀する、事行の一念三千の南〇經是なりと教を垂れ玉ひたり。此御垂教をば世人が作用するも文字摺りに扱ふて法相より執つて義主を解せざるがゆへに、難有なきものなり。此御釋をば、今や換言採取して表示せば、それ今世衆生が己心の佛意因果の究竟を易く指南し玉ひしものにして、本因妙實理上より、心理を探知する時は、己心中に、修徳の佛性と性、徳の佛性と、二様あり。此中に修徳の佛性をば、久遠實成名字の妙法(因果)と云ふなり。是は之れ性徳の佛性を喚起するの境として、己れか性徳の佛性を唯今顯したりと、實義を取きて、口唱の事行を專用することを、餘行に渡さすと云ふ事行の一念三千の南〇經

法相上より本因妙の純正實義を表示して餘行が本因妙を穿つ

といふなり。此事實を即本因妙因果究竟の誠諦實相印とす。是を諸佛戒の自行因果とするなり。尊ひ哉。法妙なるがゆへに人貴し、人貴さかゆへに處貴しといひ、正さに知るへし。宗祖所顯の三祕は此法相なり。予が著日蓮宗實理に對照して。能く此實義を解すへし。以上は法相を照見する實地の本因妙也。

予情々願るに。全体此本因妙をば、本佛の自行なりと結觀せざるへからず。化他機情的を論しては、或は教主に惑ひ、或は本尊に迷ひ、或は受持の教相教理に紛亂し、眞實の本因妙を、掌中に領せざるに至ること明かなり。此義理を證知すること、難中の易なりとするも、先以て本有の法相は吾がものとする觀を立る事を、第一着に度量分別せすむはあらざるなり。是を此れ絶待觀とす。此絶待實理より論する時は、本因妙には本尊といふことなく、假令ひ本尊といふ名唱ありとも、化他機情的の本尊の主義のものにあらすして、之を絶待妙とす。是れ今世の法相三祕實理深絶の義なりとす。此所以を以て本尊といはず、三祕密と唱ふる義趣を以て知るへし。今是を換言すれば自

己が己心中の三絶を以て、或は本尊と稱し、教主と仰ぎ、或は法と尊奉し、或は本佛とす。是れ良とに本來本有にして、無作の法相法理なりとす。既に此の獨明の行儀を本時圓佛か自行を果し玉ひし其實相を以て知るべきなり。唯本佛は一迷の人にして、因果獲得の率先の人たり。豈に之を本因妙の第一義諦と云はざらむや

●本因妙の法相と本果妙の法相と一同の事相を表示す

本 有 三 因 圖



宗祖曰く在世の本門と末法の始は純圓一同なり等云云

右は本果即本因妙の法相を同一と指南し玉ひし証表也、

世人一般盲目者たり。本有の三因ありて本佛迹佛出現し、諸佛も成道を遂げ、十法界の情非二世間も森羅萬象一切悉く、此乃三因の爲めに、本有の尊形となるといふことを知らず。地水火風空の五大が、即妙法五字なりとして、本來本有の三因あることをしらす。本佛の色心が、妙法五字なりとし、十界の心理か、妙法五字なりと誤認する等の迷障の甚しきは、譬ふるに者なき破法破佛家といふへし吁々

宗祖曰く。本有の三因無くむは、何を以てか佛の種子を定めむと、釋し玉ふものは、現に人法躰一か、妙法にあらざることを明かなり。本佛は本有の三因の爲めに、一念三千の成佛を遂げ玉ひしこと燦然たり。中古の愚者は何ぞ人法躰一を捏造し、引ひて未來を眩惑するや、魔と云わさるへからず。法相を知らざる不相傳の輩、初心末學といわずして何ろや。人法躰一者流の啞法吁々哀れむべきかな

本因妙の法相と本果妙の法相と一同の事相を表示す

●本有の法相を表示す

それ辱なくも法相と云ふことは、直に教相といふことにあらず。教理にもあらずして、其威高く、殆ど性質を殊にして、教相教理の本源なり。所謂ゆる如來の尊形なり。十界本有の心理に住して、離ることなく。上みは佛界より、下も三趣に至るまで、心理に具徳するものは、此本有の三因の法相なり。此法相なかりせば、十界平等の成佛することなし。此本有三因の法相か、十法界に涉り心理に之を同一に懐けるを以てこれへに、平等一に成佛するなり。然かるに是を衆生一般に知らず。是を教しへしめむかために、願力の如來出世して、衆生に之を懇示するに當て、其如來が言語を以て、救護を興ふる之を教相とす。其理が衆機に貫徹するを、教理とす。左れば教相と、教理の如きは、法相の心理なる實相を衆生に施與し玉ふためのものと知るへし。然り而ふして、此法相は無始常住にして萬法を主宰す。此故に三世化導惠利無疆の如來は、此法相を携帶して三益に涉り玉ふ。爰を以て種、熟、脱、皆同一の法相とす。同

一なるがゆへに、成佛亦同一の成佛とす。同一の成佛を、一念三千の成佛と唱ふるなり。宗祖曰く。一念三千の成佛にあらざれば、有名無實の成佛云々と示し玉へり。三益同一の法相、二述したることを証せば、既に上みに圖したる法相は、二千餘回の昔日本果の實相を示し、今世無教に際しては、實相の實義を顯示し、下種と唱へて一念三千に的せまむ。尙を未來に及て、彌勒佛が、熟の世教を垂れ玉ふに、此法相を顯示す。良とに、種、熟、脱、三益、循環して、息まざるは法相同一なるがゆへなり。其法相とは云ふが如く、同一なれども、現在衆機異なるを以て、法相を冥合せしむるに、受持修學の實理を殊にするなり。爰を以てのゆへに

宗祖曰く。但し彼の脱なり、此は種なり、彼は一品二半、是の唯題目の五字なり云云。是則示すが如く、法相は一なるも、衆機差別せるを以て、觀修の方便が違ふことを垂教し玉ふこと如是

會て顯本の法相に於て二なく、別なき、ことをは

宗祖が示して曰く。爾前迹門の十界の因果を打破て、本門の十界の因果を説顯す。是即本因本果の法門なり。九界も無始の、佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具百界千如一念三千なるへし云々。

右証するが如く、正さしく法華の實相なり、壽量の法相なり、三益化度は品物なり。是と常住乃一千三念とするなど。教主は此法相同一を以て、或は教卷に約し、教理に約し、法門に作用し、心相に應用し、情、非、二世間に教示し、成佛の名稱に依用し、佛陀如來に專用する等の、示教利喜の善巧方便を施し玉へることあるを以て、能く之を分別して、件の法相を、曲會せざるに注意せざるへからず。法相を曲會せざるに注意するとは、曰くそれ、或は人法躰一に、或は空理に、或は文字に、泥着する等の、惑ひなきことをいふものなり。記者曰く、法相を空にして文字となせり、一切法華の實ききに陥入りて、佛法の形ちなきに、至るへしといふ。

龍樹菩薩の如きは、如來といふことを釋し玉ふに、曰く。法相を、法相の如くに、説き

玉ふを如來といふと、示しゆれば、本有の三因を、即法相といへば、此法相を曲けては、如來といふ實理に契はず不法となることを、思ふべき者なり。此大論乃釋に依て觀るときは、如來にあらざれば、法相にあらす。法相とは、即心理の中實の名稱をいふなり。如來とは、心理の尊無過上の實形をいふものなり。此實形をば、即文證に宛ては、壽量經の、如來、秘密、神通之力、是れ法相の形容を説けるものなり。此如來の尊形をば十界心理に宛足せることを、權實を立て、明説せるは、方便品の、則ち、如是相、性、體、是也。正さに知るへし。方便、壽量の文證は、法相の實形を、説明したるもれにして、字句にあらざるを開悟せざるへからず。是を以て之と憶ふに、法相は微塵も曲會することを得へからず。尋常の心理の姿が、即法相なり。此實理に照らしては、人法躰一の實相を、法相もなく、人法躰一は、常に空想に作用したるものなりと知るへし。焉を絶待心理の法相をば、空相を以て眩惑すへけむや。法相は即實相を以て照明し、實相は文相を以て証明し、文相は今世の道理に照徹して光々赫々たり。人法躰一は、法相も

、實相も、文相もなく、道理何れの世にか立つへきや。天、地、人の証明なし、殊に諸佛、誠諦の實相印なし、誰か之を佛法といはむや。本佛を口實とすれども邪々の天上なり、吁々此邪々を如何せむ明王出現の日は、對治せらるへしといふ討罰をみよ。

●人と法とを細論す

るれ人とは、衆生世間に相對し、若し其れ父母所生の肉体に約すれば、相如是に對待して、完く有情の境界を觀るものなり。斷して法相に交入するを許さず。其意は性質差別するかゆへなり。其れ吾法とは、五蘊、衆生、國土の三種の法相外に達して、獨一絶妙を占めたるものなり。

是は三種に即する因果の法相なれば、十界の心理とも殆むと絶位を證する大法なればなり。決して肉體相如是と、相對は、愚かなり、其性質を一体にせむんや。然るに人法躰一なむとは、即ち馬鹿といふの比例の如し。世俗理學者が甘睡にも劣れり、相對、絶待、

を知らざる無智無學の現證爰にあり。有智の佛者大笑せむ。法華とは心理一面なるものなり。肉體相如是を相對し、衆生世間を相待するものにあらず。心理に實相を起して容相を示すと、法華といふかゆへに、人と、法とを差別し性質名稱に顯現したり。誰れか諍むむや、法相は人と法とに判然して空、假、中、共に常住に別なりとす。若し人、法、が体一ならば、忽ち三種世間も体一といわさるへからず。三種か体一ならば、一念三千といふ法相、無差別とならむ。實に言語道斷抱腹絶倒。上は有頂天より、下も那落の底までも、斯かる馬鹿談はあるへからず。

●法華性質細論

◎獨一法界なる妙法五字は、不縱、不横、絶待觀心妙の、實相證也

◎法身多寶 ●斷德性質 ●佛法妙

◎報身如來 ●智德性質 ●佛法妙

◎應身釋迦 ●恩德性質 ●佛法妙

●(因果並常本有の法相心理也

右を法華とし蓮華ともいふなり

◎上行菩薩 ●(生死の外とに出る性質也

◎無邊行菩薩 ●(斷常の際を踰る性質也

◎淨行菩薩 ●(五重垢里を離る性質也

◎安立行菩薩 ●(道樹徳圓の性質也

●右を宗極地の住人なり

件は常寂光に徧即し各々性質異なるを以てのゆへ、主宰する處亦異なる也。焉と躰一といふことを得じや

是を五重をといふ。五重をい、其性質と、其体の一ならざるを証明したるものなり。之を了知せよ

●宗祖御一身の性質を分別す

一 内證壽量 ●已心の妙法獨一法界

一 外用壽量 ●法、報、應、三身如來

一 垂迹上行心理 ●佛意五蘊世間

一 再誕二蓮大師 ●性質・衆生世間

一 父母所生肉身 ●國土世間

右の如く性質五科とす。會て本來本有なれば、各別して躰一といふへからず

此現証を以て、相性、体を分別し以て法相を混せずして、一念三千を知るべきものとす
人法体一の輩能く合點せよ

●人法躰一の邪觀の妄信を訂く

一 蓮祖の色心を、本尊とすると云は、即爾前權教の因果異性の教理に屬して未だ絶待の教理、第一義悉檀とならざれば、本因妙の法理とするに足らず。全体に、法華の法相に似すして、法華の何物を知らず。虚戲の底抜けなりと、いふ道理を知らざる哉笑ふ

宗祖御一身の性質を分別す

人法体一の邪觀の妄信をく

へし

一人法身一の邪觀に住しては、正さに權教權佛を信するも齊しく、他力の成佛を望むものなり。何れの國土に往生を願ふや。方角を指せよ呵々笑々

一人法身一家の如きは、逆祖をして、或は本尊と唱へ、或は教主と稱し、或は題目となし、或は導師となす等の區々にして、取扱ひを異に云ひなすものは、他なし方嚮を失ふたるの現証にして、何れを實理とするや。宛かも狂人が、方角に迷ふたるか如きか、笑ふへし。出離の趣きを知らず、涅槃の道に踏迷へるか。惘然といわざるを得ざるなり

一逆祖として。本尊と云ひ、教主といへは、是を主宰し是か原素となるものは何物ぞや。定めて逆祖か、妙法も、色休も、特り造作しざりといふならん。此邪理を推す時は、宛も基督教の如き、虚談を云ふものなり

一宗祖をして、本佛といふは、誰れが是を證明するや。實相印なきもれば、外道の説と

云ふべし。人法身一邪見者の外に於て、世界中には凡身を佛体といふものはあるべからず。彼等が如きものは、如來の色相を觀ることを得ざる、生盲者たらむか。法華誹謗の答に依て、長劫に流るもの吁々惘然の至りあり

一人法身一の僻輩は、無作三身の事相を知らずして宗祖を、無作三身といふ笑ふへし。本果に至て、本有の佛色身を証したる時、始めて無作三身を顯示したるを知らむや。本因妙の時に、無作三身あるべき道理も實証もなし、既に名字といふにあらすや。全身に人法身一の輩は、無作三身といふ名稱は、色休に付すべきものにあらすして、心理の名唱といふことを知らず。色休を指して無作三身といふ証跡なし、祖判に無作三身といふ法門を作用してあるものは、理を云ひしものにして、一念三千の義にあらす。理をいわば衆生一般に無作三身にあらざるはなし、理を空に取て實相を害するは法華の本意にあらす僻。輩是を辨へむや、本因妙に無作三身ありては、本因本果に互りて二人あるもの、如し、本果の無作三身は教卷に實相印あり。疏釋にも證せりといへ

とも、本因妙の其名唱は、唯理性を、指すまでにて實相印なし、証據なきを如何ひせむ、達摩觀は、法華の所用にあらず。僻輩考ふへし呵々

一人法躰一の邪觀を、立る時は、先づ常寂光が空々となるへし、是次に一念三千か虚

無となりて、信しても其甲斐なきものなり 是然ふして成佛の容相を語るに會て實

義なきものなり 是本佛自行の法相が破滅すべきなり 四是人法躰一の邪觀を設くる

時は、權實も本迹も、一切空々、寂々となるへし 五結局は人界一部上の、捏造邪

觀といふに止りて、畏くも、佛陀如來といふ、實相の實義が、亡滅するものなり 六

右等の大亂暴となることを知らざるは、學者の斷して興せざる處なり。僻輩佛智を被ひ

りて考へせよ

●無作三身の實相を。脱佛とたもふ。僻見僻案叩く

宗祖曰く、壽量の一品を弘通すべき時ありと。予が曰く壽量とわ、經文の事をいふにあらず。能く法相に就ひて觀る時は、五百塵點の所顯の無作三身の佛色身を指すなり。

此壽量の一品が、現世末法に必用なることを、指示し玉ひしものなれば、此實用を研

攻せざるへからず。若し是をして、文字と思ひ、教理經卷などに、僻依する時は、壽

量一品の弘通に用なきか如くならむ。人法躰一輩、此義を瞭解することを知らず。哀れ

むべきかな

宗祖曰く、一切經の中に、此壽量品座さすは、天に月日なく、山河に珠なく、人に神の

無らむか如く云云

右の御釋も、即ち末法に入りて壽量品の要と、撰釋し玉ひしものなり、監みるへし

宗祖曰く、今日蓮が所行は、靈鷲山の稟承よ、芥子の相違もなき、色も替らぬ壽量品の事

の三大事はあり矣

妙樂の曰く、壽量品の佛を知らざる者は、不知恩の畜生なり矣

人法躰一の僻輩、未だ壽量品を知らず、此佛體の色相を知らず、不知恩のものなり。妙

樂の釋の穴に陥ちたるものといわむや。それ天台曰く、壽量とわ十方三世の諸佛の

無作三身の實相を脱佛とたもふ僻見僻案を叩く

功德を、詮量するゆへに、壽量品といふなりと釋せり、此事實に就ひて觀る時は、今世末法に入りて所顯する三大祕法は是壽量品なり、取りも直さず、本佛が功德を壽量品と稱し。十方の諸佛が此實相を宣揚し玉ふ功德、皆是れ壽量品なり、曾て經文にあらざるを、明知す。然るを此功德の實體を、發揚せざるものは不知恩といわむや。それ此の如き尊大なる壽量品を有名無實に閉くがゆゑなり。若し此功德の實相無かりせば、法華は文字に止まりて、羅什翻譯の六万九千三八四字を、法華と名けたるもの、如し。尙亦如來といふも文字とあり、唯理屈に止まり、無作三身もそのま々の三人前の形ちといふ、單空理に歸するものなり。中道の佛といふも、常住の佛陀といふも一切以て實體なく、其尊容を伺わさる迷者となりて、則ち父統の邦に吟ふものに、紛れなしといわむや。爰を以て顧みるに、末法に入りて發揚する、本門三祕なるものは法華壽量品なり法華なり、即蓮華なり、無作の佛意なり、法相なり、焉と是に尊形ならむや。若し亦之をして脱佛なり、もぬけ佛なりと、譏謗を加へて建立を格かむには、經釋の明文は反古なる

へし、特り人法躰一の邪屈が正義實理なりと想像するが如き愚の甚しきものなり。予が稱道する名義の者は、法にまされ、佛陀如來にまされ、惣して有作のものなく、本來本有無作にして、一念三千にあらざるはなし。予か尊崇する尊形佛は、一念三千にして、本時は無始なり、法相とも、如來とも、仰きて諸佛が護念する處の實相の大法なり、今日にしては是を祕法と唱へて佛像といはす、造佛と語らざる本有の佛意是なり。之を教相に宛れば法華本門と唱ふ。傳教の曰く一念三千即自受用身、自受用身とは出尊形佛矣。宗祖曰く地涌千界出現して、本門の釋尊乃脇士と爲る、一闍浮提第一の本尊此國に建つへし。天台曰く、後五百歲遠沾妙道矣。傳教曰く。正像稍過已末法太有近法華一乘機今正是其時也矣。開迹顯本二佛三佛説て曰く、如日月光明能除諸幽冥斯人行世間能滅衆生闇教無量菩薩畢竟住一乘矣。應佛昇進の自受用報身佛説て曰く。後五百歲中廣宣流布矣。右掲ぐる所の証文は、正さに法華の、實相の光顯するを、審判證明したるものにして、

即ち一念三千の蓮華、今世に興るの證也。人法躰一輩等が、右の文証を宗祖出現の應用文とするも、本佛出現の實相印なし。予が既に稱道する、三大秘法興行の的據たり、正さに知るへし。予が是を振張するものは、開山師が嚴命に隨ふの意なり、僻輩か文字論をするも、義論を知らず。予は義論を發揚するものあり。義論とは法相の實義を彰論するをいふ也

從來の學者は、脱佛と、本佛と、判然せるを辨へず。其意は壽量佛を脱迹の佛と誤認して、完くの本佛が、脱を興ると云ふことと知らず。其本佛が説教をば、脱迹の佛が説法と思ふの類少なしとせず。其教相を依用しながら、本佛が教示としらす、斷して脱佛が、教相なく嘲弄して、本佛が説く法華を撥無するものなり。予は壽量教相を一品本佛が説法とす。宗祖曰く、涌出壽量の二品を除いては、皆始成を存せり矣。妙樂曰く、眞實の斷惑は壽量の一品を聞く時也矣。天台曰く、開迹顯本皆入初住矣。本佛曰く、以何令衆生、得入無上道、速成就佛身矣、

件は皆本佛が脱を興へ玉ふ證票にして、迹佛が利益にあらざるなり。殊に壽量の教文を觀よ、常説法教化、常住此説法と、いふを以てす必ず種、熟、脱、三益一人して、本佛か感應妙を施くものなり。そのゆへに、天台曰く、三世の化導慧利無疆といふ、本佛一人より、佛法の妙用を教興するなし。迹佛は當分の究盡せる理の一念三千より外は施教せず。常寂光は唯本佛一人而已。斯る法相より論及すれば、今世末法には、本佛の實相を教相に適合して、興行せざるへからむ。左れば

開山日尊上人曰く。余が門弟相構へて。上行等乃四菩薩相副ひ玉へる久成の釋迦云云。廣宣流布の裁斷を待奉るべきものなり矣

日尊上人は上と、宗祖御在世の法相を事行せむことを、門弟に遺言し、未來純正の廣布を竣つへしと、豫言を置き玉ふものは、即經釋祖判に匹的して、毫も違せずといへとも、此實義を伺わさるもの、如きは、釋迦といふ名稱に惑ひ、上行等といふ其名に迷ふて、脱とか、迹とか、教相とかいふ、卑屈に陥りて、其奥重を知らず。正さしく法

華を知らざる賤卑の者たり。

ろれ吾山の法相は、三益惣在の實相にして異動なきものあり。若し此法華を僻見して、普通の無常佛と爲すときは、自己の佛性を觀ることを得ざるものなり。日尊上人が指授し玉へる佛體の、本有の五重玄といふ大法にして、腐肉の舍利にあらざる大心理にして、十界の佛性を興す如來なり。天竺應佛と取違ふへからざるものなりとす。正さに知るへし。應佛は絶待にあらす。一念三千にあらす。當家に興す處の法華は是れ、實義より出興するものなれば、他家の像立佛とは霄壤の違目よりも尙異りて、本有の佛意一念三千といふなり。

右了簡して伺わされは知ること能ざるものなりとす。初心末學は輩は、金箔付きを視見て、肝を冷やし怪物の如く云ふといへども、凡夫の腐骨を觀て、本佛とか報身とかいふものは、如何にも怪物といふへし。心理の實相にあらざれば、如來にあらす、秘密にあらず。神通にあらす、佛陀にあらす、法華壽量にあらざるなり。予が指す所の如來は、

是れ一念三千の如來にして、一切の諸佛が實相印を證する心理なり。換言せば一切世界中の、人の心理に住し玉へる、本有修徳乃佛意が顯本したる尊形佛なり。之を知らざるもの、己れが一念三千の佛色身を知らざるものといふべし。此如來の實理を叩ひて己心の佛體なることを、覺了せされ、自他共に成佛の實を辯ふることを能はず。それ世人一般に佛陀如來といへば、天竺出世の釋迦の姿より、外には佛陀如來の容貌を知らず。木像の光りたるを見て惣して差別なく、如來とおもひ、佛陀とおもへり。ゆへに人法躰一の邪義は、中古僻學者の甘睡に誑されて、金箔の色佛をは單に、脱佛と云ふは笑ふへし

辯惑觀心抄に大石日應曰く。法身の舍利あることを、日守は知らざるのと出放題を吐きたれども日應は法身無說法諸經の常談をしらぬ馬鹿ものなり。日守は荷も三二三の如來之舍利を語るにも抱らま、日應が無常の單法身を擔ぎ出し、無作の三身に對當して、不像立を諍わむとする頑笑ふへし。それ顧るに像佛のことに至ては、文證論に成立

つにあらず。文證論に成立つ像佛は、當家に取りとる所。蓋し壽量の三如來の如きは、文
 義と、實理と、法相と、相應して興行すれば唯普通語を以て、像佛と云ひ倣はせじも、
 其實像佛といはざるを本理なりとす。ゆへに法相を、能く習わさるべからず。外良は即
 佛像に似るといふことも、佛像といふべからず。若し是をして、佛像といわむとすれば、
 一念三千の實理を亡すへし故に

宗祖は三大事、亦は、三祕密の、法と稱し玉へり。良とに所以へあるあな。當家は之
 を法相に因りて、建立し玉ひしものなれば、實義を以て、三大祕法と唱ふるなり。
 人法体一の僻輩、妄りに脱佛といひ、像佛などといふを止めよ。若し無謂、吾山の三
 祕密を、罵詈するものあらば、悲しむべし。是は之れ已心の因果を撥無するものにして、
 隨罪泥梨のものなり。左れば、日尊上人が此三祕密の法を、興行し玉ひしは、三災四劫
 を破壊する魁なり。人法体一輩は、此實義を知らざるを以て或は

宗祖開祖の御在世は無かりし佛像を成したりとか、不相傳とか、謗法とか、馬鹿を語る

といへども、却て、汝等が不相傳謗法なることを、おもひ遣らるゝなり。宜しく法相の所
 在を習へ、一念三千の實義を相傳して、誣法を吐き、途轍なきことを、云ふを謹めよ。
 予曰く。人法体一の僻輩妄りに、吾山の三祕を誹るゝ、他なし怨嫉なり。

宗祖開祖の在世に之を興行し玉ひしは、時機到來せざるかゆへなり

當家は時至れるかゆへに、建立ありしなり。畢竟此實相か顯れされは、下種の賜のを
 一切衆生知ること能はず。亦一念三千の成佛をもするを得ず。殊に本因妙の實義が彰
 れざるものなり、何となれば、既に上來述るか如く、本佛の功德が隱没せるなり。世人
 豈是を知らむや。三祕の尊形は本佛が自行れ功德なり。此尊大なる實形彰れされは、則
 ち近くは、開迹顯本の實明ならず。遠くは、久遠當初に於て、本佛が自行の功德あるを覆
 藏し、彼の僻輩が常談の本佛即座開悟の種子も見へざるなり。所詮此三祕を興行せされ
 は、一切佛陀如來の、空々寂々の論理を脱れず、一切非情、有情、の成佛の、實體を知るべ
 からず。成佛といふことは、有名無實となり。斷して法華と、文字にのみ徧りて口唱妙名

も虚戯なるが如し。一念三千も妄語なり、法性真如も妄語なり、本有常住も妄語なり。萬有無實相となりて佛法は信するに足りざるに結着するものなり。苟くも中道實相を論ずるものは、實相を證することゝに惑わさるゝことを要す。亦吾山の秘佛を他山に佛像に類せしむることなかれ。所詮當家の尊形佛は、一念三千なることを了せよ。此「一念三千の法相實義」を分別しかたきものは、吾山の秘密藏を語るも詮あり、此要を知るか即ち、嫡々相承なり。人法界一の僻輩が不可の喙を入るべき淺義にあらざれば、先づ教相の一念三千と、人法界一と比較して後ち、絶待の何物たるを開悟し、始めて台家の觀心を知るに至る其奥に入りて、當家の要義を伺ふことを得るものなり。未だ台家の範圍にも届かざる、人法界一輩が相對妙の物真似にも成りかたぐ、殊更に成佛の道も、知らざる妄愚の分齊として、法門にもならざる寤言を吐きて、日尊上人が、秘密乃奥藏を謂れなく誹るものは、未だ法華の何物と學ぶる幼稚のものなり。吁々痛ましひいな

●日尊上人建立の三祕の應用事理

夫れ如來の大切なることは、大論に因りて之を分別せよ^一是本時の二佛三佛の外に本佛の名義なきことは法華に壽量に據りて是を覺知せよ^二是本佛が自行因果の實相は、法華寶塔品より囑累品までにて觀見せよ^三。本因本果の法相と、名義は、壽量一品の外になきことを、開迹顯本の實義上にて、是を了解せよ^四。本時の如來は、自行を修し騰りて、因果満足し玉ひしことは、具騰本種の上に於て了知せよ^五。壽量佛の外に、本佛といふ名稱と現證のなきことは、實相印を以て了承し。本因妙の始めには、佛陀の如是相なきことを覺了せよ^六。壽量の一品に、事理的のせざるをあらは、斷して依用すへからざるに決定せむ、壽量の一念三千を以之を分別せよ^七。佛法の成佛は惣して壽量品の外に求むべからざるの一念三千の法相の爾る所とす。宜しく之を三大事に照らしめて惑ふべからず^八。是れ本地難思といふ事實も、本有無作といふ事實も、不可知的事實も、觀心といふ事實も、妙法蓮華經といふ事實も、如來といふ事實も、佛陀となる事實も、中

道といふ事實も、常住といふ事實も、法性真如といふ事實も、三種世間は實相の誠とも、
萬法悉く壽量一品(經文のよ)の法相に於て論究せよ九是

右の事實を親たり拜受し奉りし聖衆は現在に本化迹化の四依が釋を作用し、其審判證
明に照らしては三世九世三妙を含蓋したる法相なり、現世界必用の大事なり。別して
は、本朝の名譽此三大事にあり。此事實をば

宗祖が三秘抄に證し玉ふに、曰く王法佛法に冥し、佛法王法に合してと云云
日尊上人曰く 裁斷を待奉るべき者なりと矣

件の事理特り、吾山の三秘にあり、稟承家にあらすむは、熟れか是を知らむや噫々尊し
貴し。

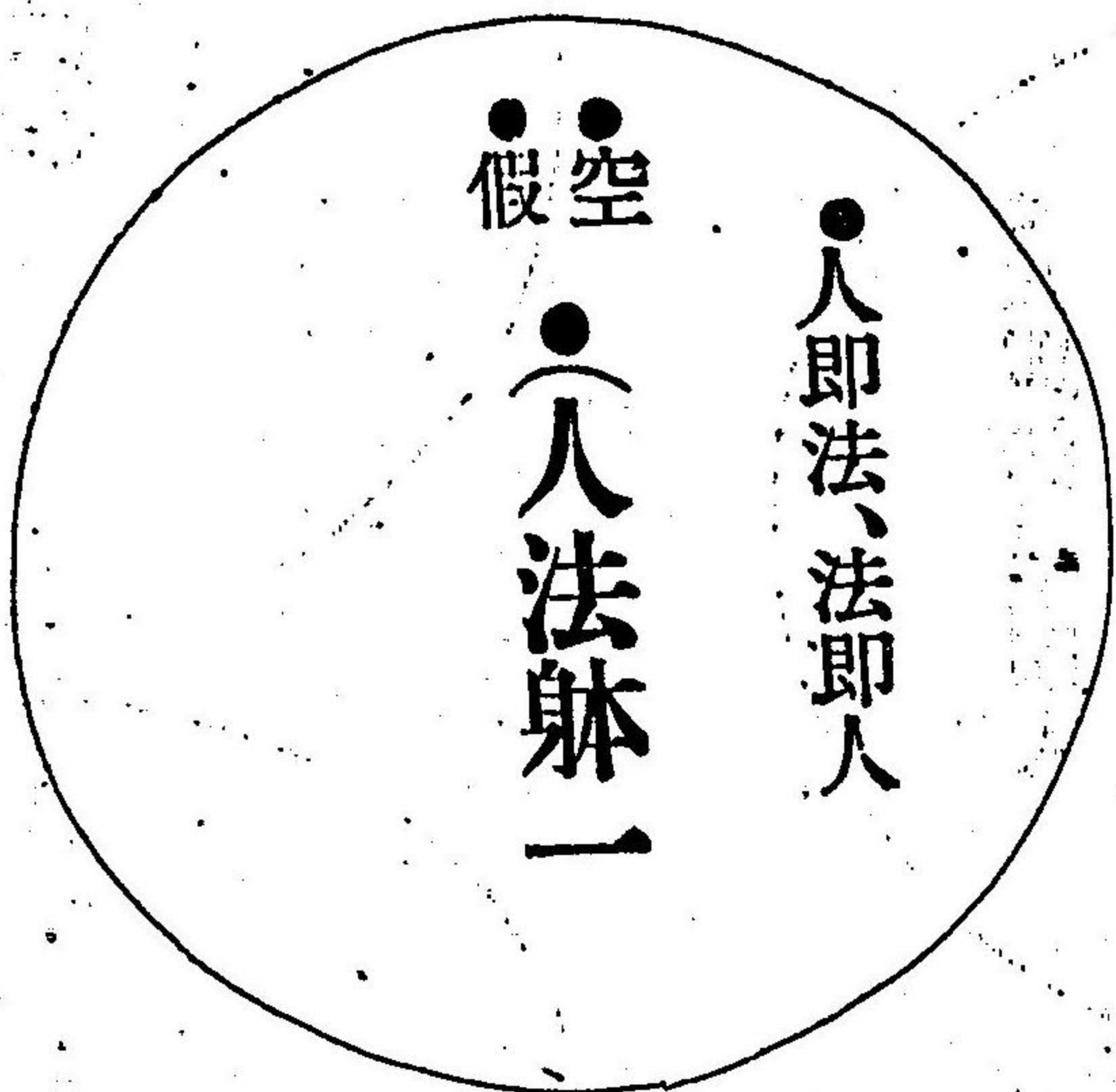
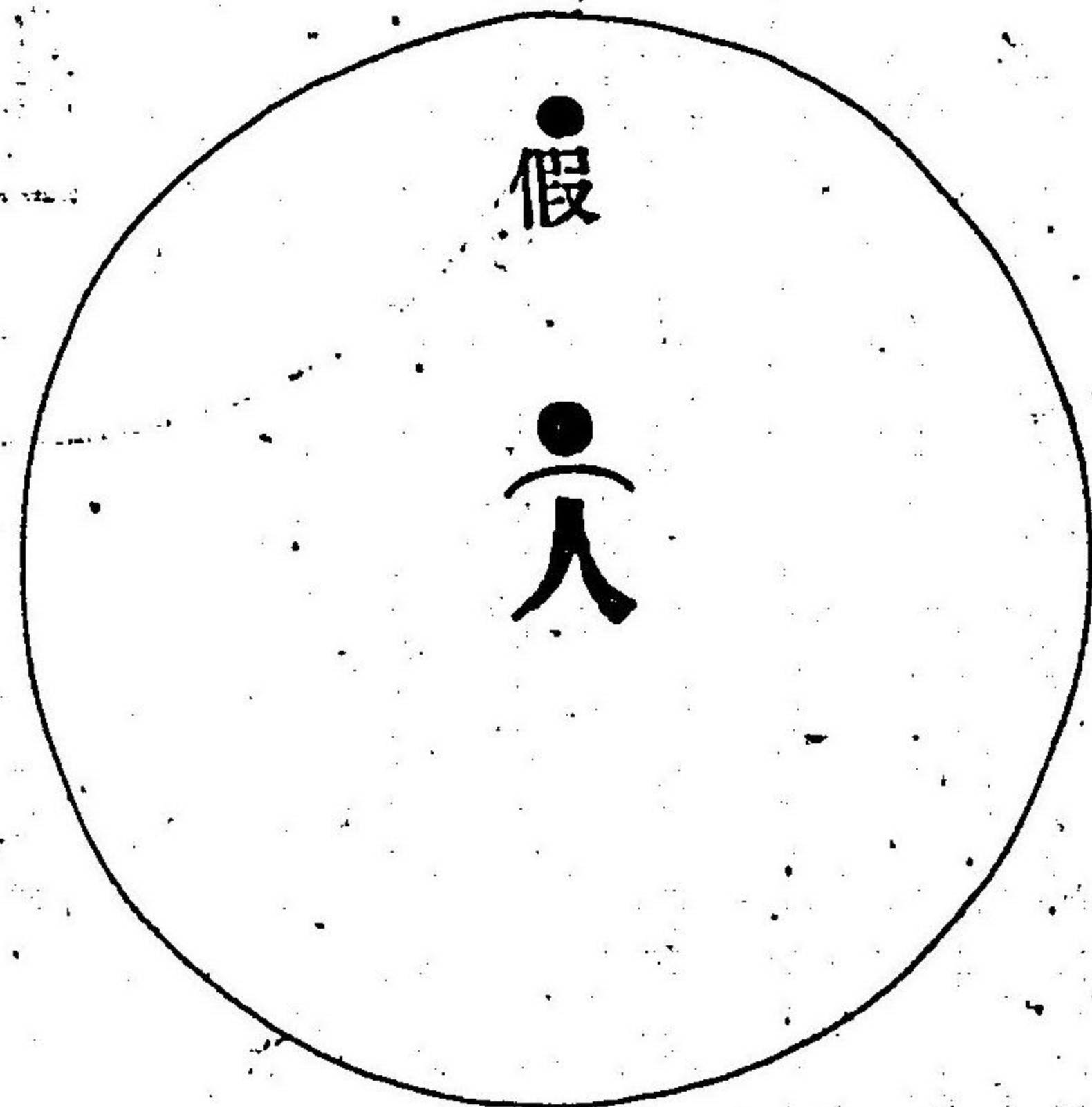
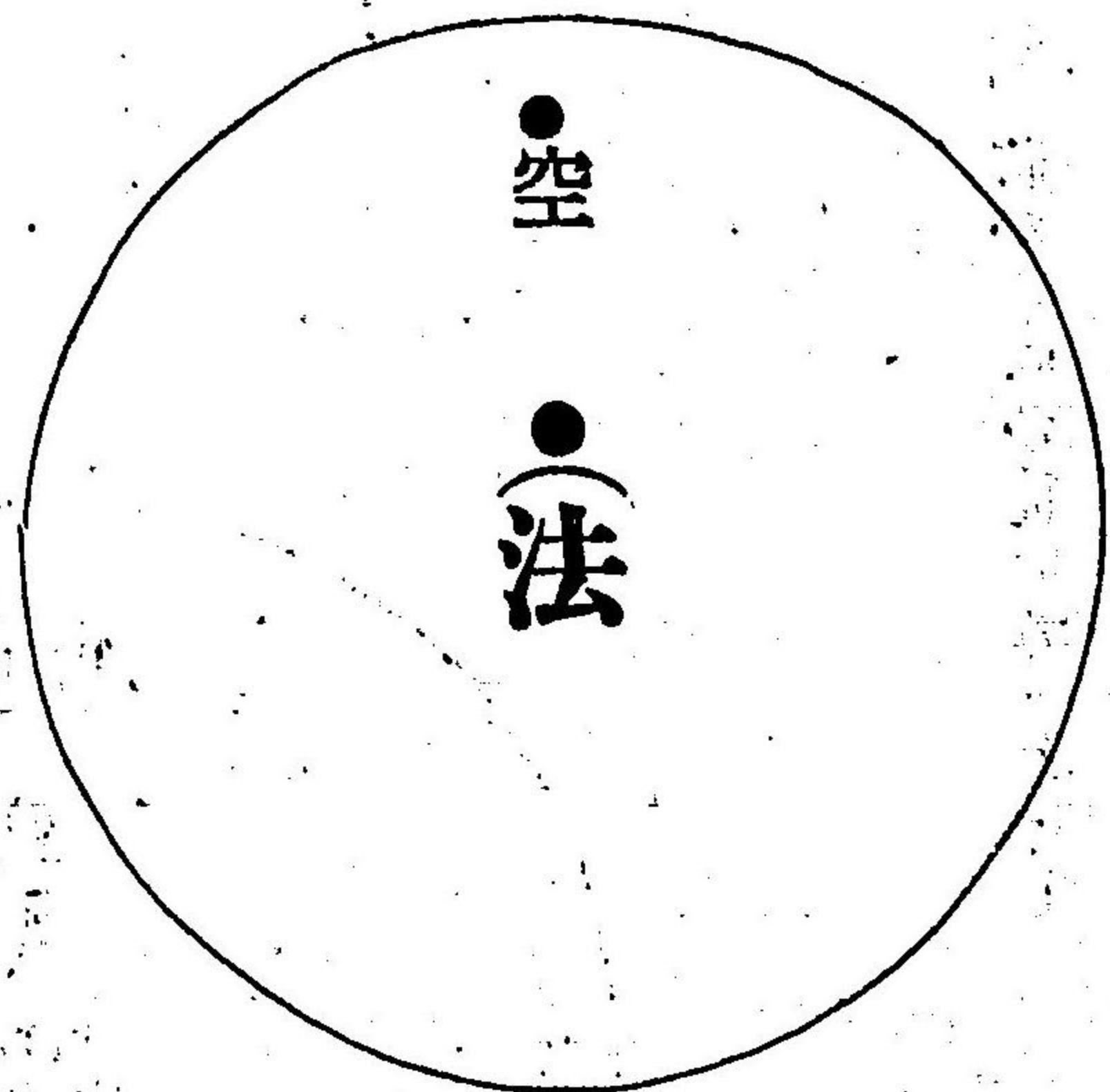
●一喝降魔談の結論

法華を弘通するものは必ず、本時二佛三佛實修れ本因と、實證の本果と、這の二箇の
法相の實体を知らざるべからず。是を知らざるものは、法華の持者にあらす。何むと

なれば、成佛の形容を完く知らざるかゆへなり。成佛の姿を知らざるもの、何ぞ衆生を
して、現當乃益を興ふることを得むや。宛かも猿の人真似と云わざるを得ず。文字の
法華を讀むも其實体を知らざれば、法華は圓体を知ることなくして、過、現、未、三世共
に佛陀が所在も知るとなきに至るべし。其意は人法躰一輩が、法即人、人即法といふか
ゆへに、其人法の原素は、地、水、火、風、空の五大とし是を本佛といふかゆへに、詰まり空
々寂々といふに如かず。争てか一念三千を知り常寂光を知ることを得む、正さに之を
以て佛法にあらすとす、成佛の道を知らすとす。翻りて法華の何物を知らず。過りて
は、宗祖所顯の妙觀(本尊)を滅体に歸せしむるの、邪々啞法に陥入れむとするものな
り噫々慷慨、なむと是に過むや、斯かる人法躰一輩といふ、邪僻を企て、本宗の面目
を辱しむるは、佛敵法敵の重罪なり。予曰く、人法躰一邪愚の者は、本來本有の佛意
の因果を、撥無するもの。其は正さに知るべし、並常因果の實相上に於て 即 有
無作の法相の姿形、嚴正に示現したるを以て知るに足る。其實相容貌に於ける、現在

人法躰一にあらざるかゆへに、痴妄に成立ちたる、馬鹿教ありといふべし。是を因果撥無の剛提人といわすして何ぞや。天台、妙樂、傳教等の豫言者は大笑すへし。右の事實に就ひて觀る時は、人法躰一者流の如きは、日宗諸派中邪々の天上教なり。其所以本尊は同一なれども、口唱のものは題目といへとも、讀むものは經文といへとも、人法躰一といふ邪を以てのゆへに、本來本有の法相を殺逆して、本尊も文字といふまてなり、唱題も經の題號なり、讀經も脫益摺りなり、與奪傍正助二行を出てさる本因妙にして、唯日宗といふことは口實耳み、斷して、本時の法華にあらすといわむ。左れば人法躰一をいふものは、法相と教相とともに一切以て佛法は形ちなさまに至らしむ。人其是をして憂へざるはなむそや、人は是を監みて改めざるはなむそや。果して魔なるか、將た蒙昧の徒か考一考せよ。

●人法躰一の事理論



右の圖に據りて觀る時は宗祖の、心を空法となしたる如し。人といふがゆへに、假となしたるもの、如し。此人法の即空假二諦が本尊と云ふにあるか。今是を難するときは、空の空にて性質別なり。假は假にて性質異なり焉と躰一といふことを許さむや、是れ事の論なりとす。今且らく辭輩が、思想に因らば、それ宗祖の御心は、妙法五字とし、日蓮の御名をは妙法五字の體となして、宗祖即妙法、妙法即宗祖なりとするが、是を人法躰一と換言するか、今更之と換言せんや、妙法は心なり、宗祖は色なり、二合して色心二法といわむか。果して爾らば、此色心は宛然として躰別なり、躰一といふことを許さず、法相を亂すかゆへなり。其意は釋に曰く。相は唯色にあり、性の唯心にあり、體力作縁は義色心を兼ねといへり。此釋に因りてみるときは、色心其縁元來別なり、故ゆへに躰一を許さず、然るに全躰辭輩か、妙法五字を、直ちに宗祖が御心なりとするは、甚だ誤謬とす。其故は法相か別なり。この意は、妙法なる心理は一切に相對を許さず。本來無作の妙相といふ實體なり、所顯の儘の實相たる法なれば、心とも體とも名くへきも。

のたわらす。別派とす。獨一法界と唱ふ能み之を了せざるべからず。此点より推及するときは、辯証が、心といひ、法と思へるものは他なし、天然の本性を指すものにして、未だ妙法の義を盡さざる、一種の、單心を、法と自心におもへる類是なり。是を或は法と云、或は心といわむとするも、此心法中に於て分析するときは、大ひに性質を異にするものありて、單に心とも法とも名け難き、實理あるなり。況や上みの本有の獨一絶妙に於てを。決して躰といふことを許さむや。完く性質遙に高ふして別を構へたり、初心末學のもの、興り知らざる所なり。況んや人法躰一の、愚痴者はを聞かば、耳目を驚動し、心意を迷惑するものなり。哀れむべし。斯く論し來れば、圖象の如く、人法躰一の如きは、法相を亂れて、空、假、中、三諦も滅相となるべし。悉皆法相に係る所なし、何れを以て論せむや。宛かも盲者と物色を論するか如し、自今人法躰一者と、法相論をあすときは、予が資格を失ふにあり、智者是を推知せよ。

●辯惑觀心抄八章七十九節の評破一喝

大石日應が將來に耻辱を貽こして、大石寺は不相傳、破法破佛の、邪見家に陥入たり。彼の辯惑觀心抄の八章七十九節を、書並へたるものは、辯駁にあらずして、予が觀心論の難破を言拔けむとし、云譯けをなしたるものなり。具眼者は、彼書の實體を觀よ、觀心論の難破一もなし。言を換へていわく、難責を受けて答辨する實義あらざれば、却て已か無據の邪教を、世に吐きたるに過ぎず。八章七十九節に、必用のこと一もなし、唯惡罵に止まるものなり。日應監みよ、前款悉く枝葉に涉れり、なむとなれば、予が觀心論の、本旨を觀よ、人法躰一を叩きたるものなり。其人法躰一か邪なるに就ひて、其言語一切誑法に止るのみ。左れば日應が人法躰一を、固守せんと欲せば、先づ其法相を嚴正に證し、其成佛の實相を列舉し、本來本有の人法躰一を、法相に。教相に、實相に、實理に表示して、人法躰一の成佛せし、證據をも出さざるかぎりは、末法觀心論の辯駁と、ならざるを知らむや。抑も日應が辯惑觀心抄を觀よ、序論より、凡例、七十九節までに、已れか打破を受けたる、人法躰一の本旨を掲げず、唯自己が負けず根性の惡言を試みた

るもの、如し。辨惑觀心抄は、争か觀心論の辨駁となりむや。活眼を有するもの自應が、其愚なることを知れ。破謬書已來、觀心論中にも、人法躰一が若し實事なれば、成佛の一段を紙上に盡せよと書きたるを、看過して、本論を失却するものなり。乍去予は飽迄も人法躰一を摧破せむとする論旨なれど、八章七十九節に當て答へず。人法躰一の成佛の、實相を證せざる限といひ、外道天魔と強責するなり。其ゆへは因果撥無れ剛提人なるゆへなり。日應汝ち、人法躰一の觀念に住したりと云ふならば、汝ち、人法躰一の、成佛する容相を紙上に盡せよ。日應汝ちは、此一点を以て、不相傳、無血脉なることを、盡未來際までも、天地人に證したるか、呵々笑止く。

汝ちか信徒學弟の盲目者は、辨惑觀心抄の七十九節の馬鹿書を悦ぶかは、知らざれども、本論の主旨に戻りて、人法躰一の成佛を、證せむ限りは、予が、第一末法觀心論は、兎の毛も動かぬことを了知せよ。予が觀心論は未來に照るへき。汝ちが辨惑觀心抄は、永切に隨獄の証を貽せりといわむ。若し否ならば、人法躰一の成佛の姿と、一念三千の成

佛乃容相とを並へて紙上に著して觀せよ。蓋し事實上の證票と、實義にあらざれば、汝ちの如く、予は守文者にあらす、ゆへに許さざるなり。速に人法躰一の成佛の實相印を出すへしと反詰す

此一喝降魔談は、人法躰一摧破の金剛杖なり。辨惑觀心抄七十九節を、此降魔談に照らして觀よ、妄語なることを知るなり。宛かも罪狀あるものを、淨玻璃鏡に、移すに異ならずといわむ耳み

● 別 評 論

一觀心抄中に、捏造戒壇本尊の云云論と、不相傳證の知るへき事にあらす。法相を明知して後ち諍ふへし。純正戒壇本尊の事實は、本化四依が與知し玉ふ處なれば、妄信者が今日の所論にあらすと言す

一血脉相承の師の事を、謂れなく云云するといへとも、初心末學のものか知る所にあらず

予が論ずる所のものは、守文的にわらすして、法相上より相承師を論したるなり。素より予が 開山師は嫡々嗣師相承なり諍ふへけむや。文證、現證、道理の、三事と特^レり備りて、天地人の證明する所なり。殊には法相を以て、稟承師たることを知るに足る、怨嫉家の知る所にわらす。人法体一輩が法相乃何物たるを、辨知せずして、此事に容喙すべきものにわらす。知相乃大切なることを了知し、然る後ち是を論究せよ。
爰に一言す

一喝降魔談終

明治廿九年五月十八日印刷
明治廿九年五月廿八日發行

定價金廿五錢

著者

驥尾日守

京都市五條東六丁目二十四番地

發行者

驥尾日守門人
金本龍三郎

島根縣松江市灘町百三十三番地

印刷者

堀熊太郎

全國全市松江分七百六十一番屋敷

發賣所

日本支宗大同團附屬
報光社

松江市殿町三百九十七番地

印刷所

報光社活版部

特約賣捌所

鴻盟社
書肆

今村金次郎

東京市芝區露月町十八番地

哲學書院

東京市本郷區本郷六丁目五番地

村上勤兵衛

京都市上京區第廿九組墨筆院前町九番月

有斐堂 有田傳助

松江市末次本町七十二番地

博向堂

岩代國福島町

武内彌三郎

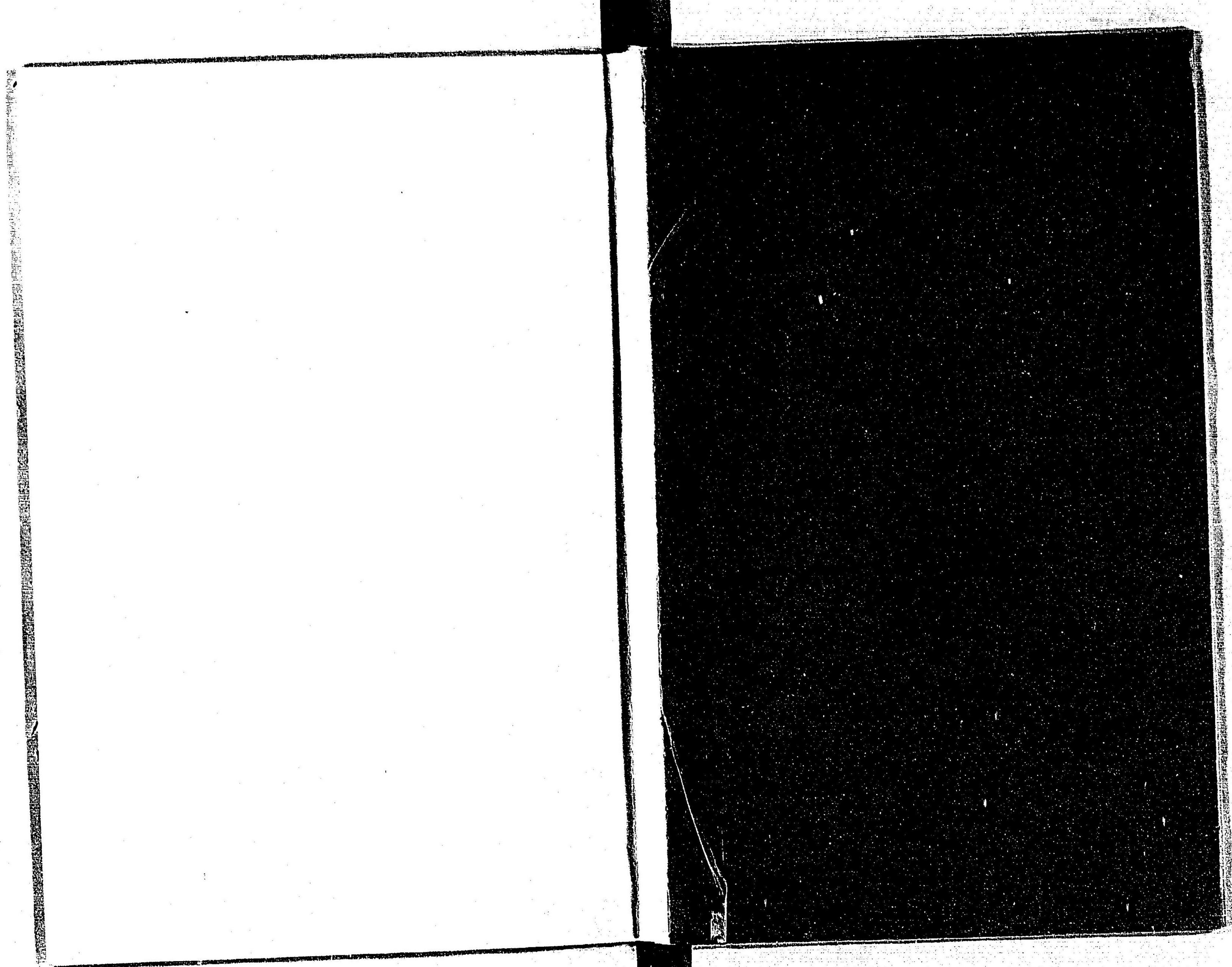
岡山市西大寺町

賣捌所

京都 田中治兵衛 廣島 積善館支店

大坂 吉岡平助 伯州米子 今井兼文

石州濱田 安達幾太郎 熊本 長崎次郎



1945-1946
1947-1948
1949-1950
1951-1952
1953-1954
1955-1956
1957-1958
1959-1960
1961-1962
1963-1964
1965-1966
1967-1968
1969-1970
1971-1972
1973-1974
1975-1976
1977-1978
1979-1980
1981-1982
1983-1984
1985-1986
1987-1988
1989-1990
1991-1992
1993-1994
1995-1996
1997-1998
1999-2000
2001-2002
2003-2004
2005-2006
2007-2008
2009-2010
2011-2012
2013-2014
2015-2016
2017-2018
2019-2020
2021-2022
2023-2024
2025-2026
2027-2028
2029-2030
2031-2032
2033-2034
2035-2036
2037-2038
2039-2040
2041-2042
2043-2044
2045-2046
2047-2048
2049-2050
2051-2052
2053-2054
2055-2056
2057-2058
2059-2060
2061-2062
2063-2064
2065-2066
2067-2068
2069-2070
2071-2072
2073-2074
2075-2076
2077-2078
2079-2080
2081-2082
2083-2084
2085-2086
2087-2088
2089-2090
2091-2092
2093-2094
2095-2096
2097-2098
2099-2100

特45

117

一喝降魔談

国立国会図書館

019901-000-0

特45-117

一喝降魔談

驥尾 日守/著

M29.5

ABH-0008

